# 一谷嫩軍記

座本　豐竹越前少掾

序詞戰克の將は國の爪牙犬馬の人を勞る則ば帷蓋を以て是を覆ふ。況や大功の人に於てをや重ぜずんばあるべからずと。漢書に見えしも宜なるかな。九郎判官義經兄の下知に依つて。奢る平家を討亡し。朝家をやすんじ奉らんと。軍慮をうながす堀川御所　オロシベ日夜に評議。區々なる。地いで其頃は壽永三年二月半。卿の君の御父平大納言時忠。偸に須磨の皇居より入來を。儲のフシ上座にすゝめ。詞先づ以て遠路の所御苦勞千万と。挨拶あればさればゝ。詞樣々術を以て。神璽と八咫の鏡は念なう奪ひ畢せしが。十握の御劍は安德天皇。晝夜隨身ましませば思ふに任せず。地先づ二祖の神寶受取り給へとフシありければ。地謹んで重拜有る。詞コハ忝き御念志。これ偏に舅君の御働きと。地悅喜の詞に時忠重ねて。詞扨又平家の要害。嶮岨を頼みの地理陣取。地中々容易の事にあらず。則ち繪圖に記せりと取出し手に渡せば　フシ逐一細見ある所へ。詞五條の三位俊成卿よりのお使者。只今是へ御出でと。地取次ぐ聲や。長袖の。フシ花の香名のみ。菊の前。襠姿のつしりと　小オクリたばひ。頃なる白菊の露をおびたる如くにてフシおめず。臆せず打通り。地大將の御座近くしとやかに手をつかへ。詞妾は五條の三位が娘菊の前と申す者。父俊成は禁裏にて千載集の役。折から旅人とおぼしき者。此歌を集に加へて給はれと一向願ひ。見れば天晴秀逸と感じながらも。私に加へん事もさだかならず。御伺ひの爲參上と。地入る事計り詞數いはぬ色なる戀人の。短冊御前に指置くも　フシ名しやくこぼるゝ風情なり。地義經も忠度の詠歌と知れどさあらぬ體。手に取つて吟じらる。詞さゞ波や。志賀の都はあれにしを。昔ながらの山櫻かな。ハレ香ばしやあてやかや。地何かは苦しかるべきと。賞美の詞を時忠打消し。詞ヤア其歌集には入れられまじ。罷りならぬと傍若無人。地さゝゆる詞を菊の前。詞イヤ申し時忠樣。お聞きの通りあの歌は父俊成も感心し。君も御賞美ましますを集に入れなとおつしやるは。地誤りばし有つての事か。憚ながら今一度吟じかへして御評議あれと。いひも切らせずヤア愚か〳〵。詞ソレ其歌は薩摩守忠度。白髭明神社參の時。志賀にて詠みしは犬打つ

童も知る所。元より忠度は俊成が門家。地弟子ひいきに平家へ近寄り。後ぐらきこと使追つかへされよと。フシ言ひほぐせば。地菊の前詰寄つて。詞イヤ申し。弟子を最屓に平家へ心寄するとは大切なるお詞。それには慥なホゝ證據といふは其方と薩摩守。兼てより樣子ある事知つてゐる。其緣に俊成が。平家をかばふ所存といふが某が誤りかと。地我も平家でありながら前後揃はぬ詞戰ひ。義經暫しと止め給ひ。詞平家方に緣有りと。一旦不審立つ上は俊成卿迄越度と成る。集に入る事かたかるべし。さりながら所存有れば此短冊。義經が預り兎も角もはからはん。地此趣を傳へられよと始終をさすが良將の。風雅の返答尤もと時忠を挽ゆれば。力及ばず菊の前猶も摺寄り手をつかへ。詞父俊成も此秀歌惜む心に候へば。跡よりよきに御差圖と。地思ひ定めし言の葉も。花に嵐の時忠に。心殘してお暇申し。五條の館へ立歸る。フシお次の方より。地武藏國の住人。岡部の六彌太忠澄。熊谷次郎直實參上と。フシ披露を待たず立出でて。六彌太御前に手をつかへ。詞頼朝公より御墨付。到來と指出し。西國の軍數日延引に付き再三の御催促。一日も早く御出陣と。地諫と共に次郎直實。詞君御存じられずや。鎌倉には佞臣おほく。義經は平大納言時忠の娘。卿の君に御心を寄せられ。亡慮のかまへなんどと頼朝公に讒言申す輩も有りと承り候へば。地時移るは悪しかりなん。急き御出馬然るべしとフシ詞を揃へ申しける。地大將莞爾と打笑み給ひ。詞ホゝ兩人が諫尤もながら。謀を帷幕の内にめぐらし。勝つ事を千里の外に顯はすこそ始終の勝利たるべきなり。義經發向遲なはるは。安德天皇所持し給ふ三種の寶。都へ返すを妬く思ひ唐土天竺へも渡すか。地若し海底の水屑とならば寶祥の傳へます。日の本はくらやみ。スエとやせんかくやと心を痛め。詞是におはする平大納言時忠は。心惰弱なる御方なれば騙つて緣者と成り。頼むより早驅け入つてこれ見よ。神璽內侍所は我が手に入る。寶劍は安德帝御身を離させ給はねば。術を以て奪返さん。地要害嚴しき平家の備へ。繪圖に畫せて案內を知る。見よ〳〵方々嶮岨を頼みの油斷を見合せ。鵯越より眞下り。詞逆落しに攻入らば。あわてふためく平家の一類。討取るは手裏にありと。地智仁勇備の良將の。軍慮を聞いて諸大名フシはつと感ずるばかりなり。詞ナウ時忠卿。一旦緣を組みし上は別心なき婿舅。天下の爲の謀御心にさへ給ふなと。地忿をなだむる頓智の詞。時忠は默然と指俯向いてフシ居たりける。地義經重ねて。

詞ヤア誰かある用意の制札。地はつと答へて高札さゝげ御前に指置けば。すつと立つて床の間の。フシ筒に生けたる薄櫻に件の短冊結び付けいかに兩人。詞今度の軍は勅諚の一戰。私の趣意にあらず。六彌太は薩摩守忠度の陣へ向ひ。御願ひの此御詠歌千載集には入りしかども。勅勘の御身なれば名を顯はすを憚りて。讀人しれずと記されし趣を演說し。地集に入りたる其印。此短冊を結びたる山櫻を送るべし。詞又熊谷は搦手の。經盛敦盛固めたる須磨の陣所へ打向ひ。若木の櫻を汝が陣屋。義經花に心をこめ。武藏坊辨慶に筆を取らせし高札。此花江南所無也。一枝折盜の輩に於ては。天永紅葉の例に任せ。一枝を伐らば一指を剪るべし。此禁制の心をさとし。地若木の櫻を守護せん者熊谷ならで外になし。其旨屹度心得よと高札は直實。歌は岡部に給びければはつと兩人領掌し。心を含む禁札の。外を和ぐ和歌の道花をいたはる大將に實あり。色あり情あり。恥ある時忠詞なく不承々々に立上れば。コハリ二人の勇士も退出の。底の底意を堀川や。深き惠を汲分けて祝ひ。ことぶく。三貫御代の春。地柳櫻や。松梅もフシ皆御慈愛に。生茂り。北野の社神々と小オクリ木の間。〳〵に打つ幕の ギン内は男女の色はえて フシ都ぞ。春の錦なり。地九郎義經の御臺卿の君。幕しぼらせて出で給へば跡に付き〳〵腰元共。申し〳〵姫君樣。いつにないそは〳〵と何を御覽遊ばすと。地尋ねられてされば いなう。詞義經樣は此社へ毎日の御詣で。則ち今日が滿る日とけさ程より御參詣。地お道迎ひの心にて思ひ立つた此遊山。木々の花より紅葉より早うお顏が見たさにと。夫婦に成つても惚れてゐる。フシ心は詞に出でにけり。地腰元共も氣をのぼしうはの空目かあれ〳〵〳〵。社の方より深編笠立派な若衆供に連れ。當世風のやさ姿お姫樣御らうじやれ。詞よう似たぢやないかいなと。フシいふ間程なく九郎義經。天滿神へ日參にけふ百日の滿願も。人目を忍ぶ深編笠。熊谷の小次郎を供の丁稚に引連れて。フシしづかに下向ましませば。地卿の君出迎ひ。詞けさとく參詣遊ばして今頃の御下向は。地定めて道に面白いお心寄があつたであろ。さすられなされた此肌を。改めたいと引寄せて。ふと股ふつつり。アイタ、、。詞何がいたいえま一つと。地つめつた跡の紫はフシゆるしの色と見えにける。地義經も御機嫌よく。詞イヤ是は迷惑。けふは遊山と聞きし故。大內は色所嫁入ぬ先に結ばれた。よしみの人にもお出合かと。地遠慮で態と遲う來たと。もたせ詞に姫君は顏打赤めコレ申

し。そんなさもしい濡衣の疑ひ受ける覺えはない。わやくな事をと計りにておろ〳〵涙に腰元共。詞こりや殿樣の皆御無理。何ぼ程隱しても新枕が證據人。たいそに有つたかなかつたかお心に覺えがあろ。アレ〳〵申しお姫樣の顏が上つた。塚治して上げなされ。地何ぞで滿足なされたら虫が下ろとむりやりに押遣るもしほ行くもしほ。小次郎來れと打連れて。幕の內にぞ入給ふ。地己が心のだくぼくに人を埋みて平山の武者所。荷擔の人と出合の約束。かたへに打ちし幕の紋目覺えの若荷巴あほうな事を企てて我身を知らぬ平時忠。跡に續いて梶原平次幕より立出で小手招き一つ所へ寄り集ひ。武者所時忠に打向ひ。詞先達て景高を以て御願ひ申上げたる。彼經盛へ遣はされし玉織姫。呼戻して某が妻にせよとの御事。則ち今日此所で婿男の結びの盃外に御相談の義もありと景高の內意によつて。是迄推參仕ると。地挨拶すれば打頷き。詞ホホ貴殿を婿に取れば此時忠も大慶其子細は。義經が邪智に誇り。三種の神器を奪はん爲卿の君を望みしを。何心なく緣を組み。神寶をふか〳〵と渡したる今の後悔。義經は末々迄我と同意の者にあらず。何とぞ姫を取返し是なる平次景高。相婿二人都の守護に据ゑおかば。地禁廷は我が心の儘。此上もなき悅びと言ふに平次はしやゝり出で。詞ナウ武者所。貴殿も我も娘達を女房に貰うて有りながら。卿の君は義經が館に居らるゝ。玉織姫は經盛が西國へ連下れば。兩方ながらおも長な談合。サア其事を此平山も色々工夫してゐると。地案じに時忠打笑ひ。詞ハヽアいや其義は何より易い事。經盛と某頃日不中になりたれば。娘を戻せと言ひやらば緣切つて戻すは治定。又卿の君が事は。地コレかう〳〵と呼げば平次聞くよりぞく〳〵踊り。詞ハヽア奪取れとはお智惠〳〵。幸ひ今日も此所へ參詣と聞きし間。首尾を窺ひ奪取らん。扨此上は義經を亡す術が肝要々々。地幕の內にて熟談申さん。いざと三人立上り。詞サア平山殿お出でなされ。アいや〳〵貴樣は姉婿マアお出で。イヤ先づ舅殿から御入りあれと。俄に舅婿呼ばはり。水の月取る猿松ども。フシ伴ひてとそ入りにけれ。地こなたの幕より小次郎は勢ひ込んで驅出すを。待てと一聲かけながら義經立出で。詞ヤア〳〵小次郎。けしからぬ勢ひにて何處へ行くやと宣へば。君しろしめされずや。此前にて三人が最前よりの相談。末々君の仇するやつばらかたつぱし打殺し。禍ひの根を拂はんと又かけ行くをヤレ早まるなと引留め。汝より義經が始終の樣子は知つたれども。軍を出さぬ其內に。一

人でも味方の勢討取るは不吉々々。又某を亡さんと彼等がいか程もがいても。燈心で磐石及ばぬ事。構はずとも捨置けと。地さも大様に宣ふ中。幕の女中聲々に。詞なう悲しや卿の君様御自害遊ばしたと。地叫ぶに義經小次郎も驚きさわぎ驅着くれば。御痛はしや卿の君劔に伏して事切れ給ひ。枕に殘る一通有り。こは訝しと押披き見給へば。筆の運びも定まらず讀むも哀れの文のあや。詞誠に御館へ入りしより幾千代迄も末かけて　御情を受け參らせんと悦びも仇夢となる。地我が親の惡心と見るより心附々にも。聞えを憚りとく〳〵と繰返し讀終り。詞ヘツエ是非もなし。親の惡事に心を苦しめ。世を見限りしか殘念や。死なずとも濟むべきに。さすが女の細き心。地傍に居ながら別れにも我が身を恥ぢて詞さへ。交さず果てしか不便やな。短き契りで有りしよとやゝ御涙にくれ給へば。悲しさまさろ腰元共。血氣にはやる小次郎もフシ俱に涙にくれ居たる。地暫く有つて御大將屹度思案をめぐらし給ひ。小次郎來よと耳に口。コレナから〳〵とつど〳〵に言含めよく計へとばかりにて。編笠に人目を忍び。フシ館に歸らせ給ひける。地直家は差心得邊を見廻し。詞卿の君の御立ちなりと高聲に呼ばはれば。地かたへの幕には平山梶原スハよき首尾と夕暮時。頬かぶりに顔かくし家來に呼き領き合ひ手ぐすね引いてフシ待つ所へ。地腰元婢付隨ひ御乘物を先に立て。小次郎跡に引添うて歩み來るを見るよりも。此處彼處よりむら〳〵と走寄つて乘物を。奪ひ捕らんとおつ取卷く。詞小次郎すかさず身構し。ヤア慮外なるうづ虫めら。忝くも義經公の御寵卿の君の御乘物。狼藉を働いて後悔すなときめ付くる。ヲ、サ〳〵卿の君知つてゐる。四の五のなしに渡さぬと其前髪首さらへ落すと罵れば。地小次郎は耐り兼ね引拔いて切りかゝるを。こなたも拔連れ渡り合ひ。切結ぶ太刀かげに。女中は殘らず逃散つて。直家一人多勢を相手受けつ流して戰へども。さすが小腕の言ひがひなく。やう〳〵其場を切拔けて　フシ乘物捨置き逃歸る。詞サアもうよいわ長追すな。地いでまあ早う戀人のお顔を見んと平次景高。乘物の戸を明けて斯くと見るより悔りし。詞アアこりや死んでゐるわ。地ヤア〳〵やあと時忠も。平山諸共指覗き。驚く中にも時忠は添へたる一通こりや何ぢやと。披き見るより又仰天。詞ヤア扨は最前から相談した。樣子を知つての自害と見えた。ハア地はつとばかり差俯向き。スエテ途方にくれて居たりける。地景高はくつたく顔。詞エ、埒もない。是はまあどうせう

ぞいなう平山殿。サアどうというたらとうせうぞい。申し時忠卿御思案はござりませぬか。ハテ思案というてどうせうぞい。得心で死んだればねだりにもやられまいし、此儘で葬禮せう。婿の役に景高。供をして燒香めされ。ハイ。いやこれ末重殿も相婿。葬に立たずにや居られまい。サア〳〵ござれと 地誘はれて平山は不承不承の フシ佛頂面。地時忠は涙ながら。詞平山景高。遠路墓所迄御出で御苦勞千萬と。地禮狀文句を口上でのべの送りの營みと打連れてこそ。三重へ露時雨。地故郷を燒野が原と。見返りて。修理大夫經盛卿一門の人々と。倶に都を落汐の搦手を固めんと。福原にとゞまりて。手配何や萱の御所しばし。假居の事繁き中に養子の玉織姫。軍の事も色事も繪で見たばかり味しらぬ。行儀育ちの器量よし女房達と諸共に。浮世咄の跡や先。越中の次郎兵衛盛次が妻の裏葉。ひそ〳〵聲にて申し皆樣 詞此亂のない先から姫君と敦盛樣。許嫁ばつかりで御祝言の遲いのは。地どうした事と尋ぬれば。忠清が妻の槇の尾。詞サアじたい御姫樣がおぼこで。しかけを待つてござる故いつ迄も埒が明かぬ。ちよびくさ咄もしかけたり。人のない間にお傍へ寄つてつめつても見たり。御祝言のない先に。內證の祝言は濟むやうにせにや。姫ごぜは立つ物ぢやないわいなと。地なぶれば姫は眞請にして。ほんにとうからさうしたらつい夫婦になられう物。それ知らなんだそしてまあ。寢てから何といはうやと。袖打掩ふ其風情。薬の裏に咲く玉椿色を含みてかはゆらし。地取次の侍罷り出で。詞時忠卿よりのお使者。大館玄番殿御出でと。地知らする聲に女房達。ナウ申しお姫樣。お里の便達と諸共に。浮世咄の跡や先。越中の次郎兵衛盛次が妻の裏葉。ひそ〳〵聲にて申し皆樣 詞此亂のない先から姫君と敦盛樣。許嫁ばつかりで御祝言の遲いのは。地どうした事と尋ぬれば。忠清が妻の槇の尾。詞サアじたい御姫樣がおぼこで。しかけを待つてござる故いつ迄も埒が明かぬ。ちよびくさ咄もしかけたり。人のない間にお傍へ寄つてつめつても見たり。御祝言のない先に。內證の祝言は濟むやうにせにや。姫ごぜは立つ物ぢやないわいなと。地なぶれば姫は眞請にして。ほんにとうからさうしたらつい夫婦になられう物。それ知らなんだそしてまあ。寢てから何といはうやと。袖打掩ふ其風情。薬の裏に咲く玉椿色を含みてかはゆらし。地取次の侍罷り出で。詞時忠卿よりのお使者。大館玄番殿御出でと。地知らする聲に女房達。ナウ申しお姫樣。お里の便

入りにけれ。地參議平の經盛卿。時忠の使と聞き一家ながら不平の中。いかなる事か言送ると。御臺諸共立出で給ひ靜々と座に直り。詞時忠卿の御使者。これへ通せと仰せの內。地頬も形も大館玄番いかつがましく畏り。詞主人時忠申越し候は。先達其元へ遣はし置く玉織姫。未だ敦盛殿と祝言も御座なき事。是以て互の幸ひ。存ずる旨候へば。御戻し下されよと主人が口上。則ち迎ひの乘物も。用意致し參つたり。地早く姫をお渡しあれと フシさも横柄にのべにける。地經盛卿の詞を待たず御臺所藤の方。姫君に打向ひ。詞ナウ玉織親御から迎ひに來たが。いぬる氣か。いにともないか。地そなたの心次第ぞと。尋ね給へど姫君は。何と返答いは枕。胸もふさがる思ひにて フシ指俯向いて詞なし。詞ホウ返事のないは。いにたい氣ぢやの。地アヽ、あぢきないは人

心ちひさい時からいつくしみ。手しほにかけ育てゝも身は身で通るといふが誠。暮れかゝる平家を捨て日の出の源氏に與し給ふ。親御に隨分孝行しやと。スエ涙交りの恨みの詞。經盛卿打消して。詞ハテぐど〳〵と何を繰言。源平と引別れ。互に心よからぬ中娘を戻せとあるこそ幸ひ。コレ〳〵玄番。お使者の趣承知致し。則ち娘を返し申すと。立歸つて達すべし。其方迎ひに參りし上は。此方より人に及ばず。早く姫を連歸れと。地仰せにはつと大館玄番。玉織姫の傍に寄り。詞ナウ姫君。何をうぢ〳〵隙入り給ふ。時忠のお心は呼戻すと其儘。嫁入の御相談。コレお悦びなされ。其婿殿といふは。平山の武者所末重とて源氏の兵。姉婿の義經殿と肩をならべる大大名。あやかり者とはお前の事。サア〳〵 地早う乘物にお乘りなされと立寄る中。姫はとかうの答なくずつと寄つて玄番が刀。拔く手も見せず切付くれば。肩先ずつぱと切込まれ是はと寄るを又一太刀。うんとのつけに倒るゝを。飛掛かつて フシとゞめの刀。地さしもの經盛仰天に。藤の方は走寄り。詞ヲヽ玉織。歴々の武士も及ばぬ手際心の健氣。サア〳〵 地こちへと フシ誘ひて。地女心のはしたなう。いうて今さら恥しい。詞其心を見る上は。ナウ申し。地ヲヽ成程と御夫婦は點頭き合うて藤の方。詞コレ玉織。そなたに見せる事がある。地待つて居やゝと言捨て一間に入り給ふ。地無官の太夫敦盛は父と一所に出陣の。用意とり〴〵なる中に。母の知せに奥の間より御用いかにと出で給へば。跡より御臺女房達銚子土器携へて。ウタヒ君は千代ませナホス地婿君は三國一と祝しける。樣子知らねば敦盛は。悔りうろ〳〵 フシあたりを眺めおはすれば。地經盛は取敢へず。詞ナウ敦盛卿玉織姫と婚儀の結び。其盃を取上げられ姫へ差して壽をと。地聞くより染衣打笑ひ。詞申し殿樣。御祝言の盃は。姫ごぜより飲初めて。夫へ差すが世上の習ひ。地思召し忘れの樣に存じますホヽヽヽとフシ袖覆へば。地經盛卿打點頭かせ給ひ。詞ホヽ女房の盃を夫へ差し。壽を祝ふ下つかたの婚禮は其通り。譯を知らねば不審は尤も。幸ひの折柄なれば語り聞かす事有りと。地いひつゝ立つて敦盛の御手を取り上座に直し。其身は次に座を改め。地口外へ出さねば知る人あるまじ。詞そも此敦盛卿は。我が子にて我が子にあらず元此御臺藤の方は。法皇に宮仕へ。御寵愛深うして。御胤を身に宿せしが。人の妬みの强ければと。先祖平の忠盛へ。白河院より下されし祇園女御の例に任せ。懐胎の身を其儘。某が宿の妻に賜りて出生ありし此敦盛。地我が子と

して育てしが院參の折ごとに。詞人無き間には妹が子の歌によそへて御尋ね淺からぬ御いつくしみ。かく由緒ある敦盛なればいかなる高位高官も望の如く成るべけれども。詞官位を受けては臣下の列。重ねて帝位を踐む事叶はず。かく御寵愛ふかき敦盛。まさかの時は春宮にも立て給はん御心やと。叡慮を量り今日迄態と官位の望もせず。地扨こそ無官の太夫と。呼ばせしぞや。詞斯く物語る上からは。其土器は天盃同然。地流を汲んで玉織姫三々九度を納むべしと。仰せを菊の。滴に千代を結びの番蝶硯ひ納むる姫君の心の内の嬉しさは。ッシ早う其日の暮らしたからん。地經盛詞を改めて。詞敦盛卿へ願ひあり都騒動の折柄。法皇御幸の御行方は知らず。御身を殘し止めても襲ひ來る源氏の軍兵。憂目や見せ奉らんかと。地心ならず一門と諸共是迄伴ひ申せし事。嘴や跡にて法皇の叡慮苦め給はん勿體なや。詞其上今度の合戰は必定平家滅亡にて。一門殘らず討死せば。都へ伴ひ申す人も有るまじ。御身は是より藤の方と。玉織姫を具し給ひ。都は未だ騒しからん。暫く北嵯峨へ御入りあり。折を見合せ法皇の御殿へ移り給ふべし。地今生の對面も今日限りの經盛。暇乞に御顏ばせ見せもし見もしなされよと。スエテ涙にくれて宣へば。御臺とかうの詞も涙玉織姫女房達。驚く計りうつとりと。ッシ顏見合せて居たりけり。地敦盛大きに恐入り。詞コハ存寄らぬ父の仰せ。生れぬ先から親子と成り。けふ迄御恩を受けし事。須彌蒼海も競べ足らず。縱へ何れの胤にもせよ。後の親こそ親ならめ。東西覺えて今日迄御意を背きし事なけれど。是ばかりは御免あれ。一所に出陣仕り。御馬の先にて地潔う御恩を送らせ給はれと涙にくれての御願ひ。地經盛卿押返し。詞一旦の義心尤もなれども。親の恩と。天子の御恩一つに言ふも恐有り。是非御承引なきならば法皇への申譯。某は切腹と面色變れば敦盛卿。詞ハ、ア誤り入り奉る。此上は仰せに隨ひ兎も角も仕らん。ム、都へ歸り給はんとな。ホ、承引有つて嬉しや〳〵。源氏の勢は丹波路と。津の國の街道より二手に寄すると聞及ぶ。地敵の見ぬめの浦傳ひ。難波大江の岸を越え。河内路より上り給へ早う〳〵。畏つて敦盛は用意と一間へ入給へば。詞ソレ藤の方玉織も旅の支度を急がれよ。ヤアコリヤ〳〵染衣皆の者。取賄ひにいけ〳〵と。地仰せに御臺はサア。おぢやとオクリ皆引へ連れて入給ふ。地經盛悅喜限りなく。詞サア心安し是からは一の谷へ馳向ひ。地持口を固めんと獨言しておはする所へ。内府宗盛の使として雜兵一人馳來り。經

盛卿へ火急の御用と。一通を差出せば何事やらんと押披き。詞何々三草の合戰味方敗北。是に依つて主上を始め門院二位殿。密に讃岐八島の浦へお開き有り。貴殿御船を守護との仰せによつて迎ひの兵船指遣はす。急ぎ出立有るべき由。地讀みも終らず心せき立ち。詞サア事急なり猶豫ならず。豫て妻子に別れは告ぐる。再び逢ふも互の輪廻。地此儘に出行かん案内せよと使を引連れ。急ぎ濱邊に出給ふ。フシかくとは知らず藤の方。けふ別れてはいつか又。長地逢見ん事は片糸の結び馴れにし夫婦の緣せめて名殘を惜まんと。座敷をそつと立出でて。詞經盛卿我が夫と地尋ね給へど面影は。見ぬ隈々を爰かしこ見廻す中に落ちたる一通。披き見るより恟りし。詞コレ〳〵皆の衆早う早う。殿は出陣なされたわいのと。呼ばはり給ふ御聲に。玉織姫女房達。追々に走出で一つ所に寄集り。互に顏を見合せて呆れ果てたる計りなり。地かゝる折節奥庭より間近く聞ゆる轡の音。何事やらんと見る所に。江戸敦盛其日の出立には。雛鶴縫うたる直垂に。ナホス鎧は緋威コハリ同じけの。鍬形打ちたる兜を着て。廿四差いたる染羽の矢。ナホス重藤の弓を持ちハメミフシ勇み進んで乘出し給へば。地玉織見るより帶引締め。小褄かい取りかひ〴〵しく。長押にかけたる長刀追取り。母様さらばと庭に飛下り。フシ轡面に引添うたり。地御臺は驚きヤア〳〵敦盛。詞都へ登れと父の仰せ。其出立は心得ずと。地尋給へば愚かや母上。詞父の命に從ふは一旦の孝行。兄上達一門殘らず。骸をさらす必死の戰場。地我一人都へ歸り何面目にながらへん。是より一谷へ馳行き。父に代りて陣所を固め潔ら討死して。名を後代にとゞむる覺悟。親に先立つ不孝の罪。御赦されて下さりませと。スエテ思ひ込んだる其有樣。地母上思はず兩手を上げヤレでかしやつた敦盛。詞それでこそ我が子なれ。地ヲヽ嬉しいフシぞや〴〵。地いで餞別を祝はんと。召したる襠ひらりと脫ぎ。詞總じて軍に立つ時は。敵に矢種を隱す爲母衣をかけると聞傳ふ。是をかけて出陣しやと。地心の內は筐ぞといはぬ情や母の衣。箙にフシ打ちかけ給へば。地ハツア御芳志有難し〴〵。詞コレ〳〵玉織。跡に殘つて我に代り母上に孝行あれ。戰場へ連行く事は叶はぬと宣へば。地姫はわつと泣出し。年月待つた夫婦の盃。かはす間もなく振捨てて。殘れとはどうよくな。わたしやどこ迄も付いて行く。邪魔になるなら今爰で。お前の手にかけ殺してたべ。なんぼうでも離れはせぬと。鞍に取付き鐙に縋りフシ歎き慕ふぞいぢらしき。詞イヤ未練なりそこ

放されよと。地あせり給へば御臺所。詞ナウ敦盛。一門の人々も皆妻や子を具し給へば大事ない。連れて出陣々々と。地聞くより姫は有がた涙。母の方を伏拜み暇乞さへあら駒の。手綱に引添ひ勇み立ち。女房達も取々に御見立て申せば敦盛卿時刻移ると鞭ふり上げ。詞然らば母上もうおさらば。ヲ、さらば。地さらば〳〵の別れの聲も母の耳にはきつと立つ。駒のいななき轡の音あふり フシ立ててぞ打たせらる。地跡見送りて藤の方こらへ〳〵し溜涙。一度にわつと聲を上げ フシどうど。ひれふし給ふにぞ。地女房達走寄りいかゞ渡らせ給ふぞと。様々いたはり參らすれば。御臺は涙の顏を上げ。悲しい物は浮世の義理。敦盛ばかり此母が臆病に育てし故。軍にも得立てぬとさげしみが口惜しさ。地討死にやる母が思ひ。十五や六の小腕といひ。幼い時から舞樂を好き。軍の事は知らぬあの子。つい殺さるゝは知れた事。鎧兜を着て出たのが千騎萬騎を討取つて。分取高名したも同然。詞わけてかはいや玉織が。歌の會か香きゝに行くやうに跡を追ひ。いた心根がいぢらしい。やるまいと思ひしが夫婦と成つたしるしには。一夜の枕も交させたく。地二つには敦盛が妹脊の緣にひかされて。軍をまどめてゐるならば一日でも討死の。便を遲う聞かうかと。はかない事を心の賴み親の因果とばかりにて。身を投伏して泣給ふ。槇の尾裏葉染衣も。めい〳〵夫の行方迄。思ひくらべて一時に フシ又もや袖をしぼりける。地敷きの耳を鬱かすえい〳〵聲に人々は。すはや敵こそ入りたれと御臺を奥へすゝめやり。通路の鈴の綱引つちぎり。てん手にたすきにかけ置いたる。長刀大太刀小太刀を構へ。恐れげもなく待ちかけしは。さすが名におふ平内左衞門越中上總が妻女とは。いはねど知れてかひ〴〵し。地時もあらせず入來るは。平山が郎等成田の五郎。大勢引具し大音上げ。詞ヤア經盛はいづくにある。主人平山の武者所末重。時忠卿と相談あり。玉織姫を取戻し。他人と成つて經盛一家。討亡ぼせとの仰せを受け成田の五郎向うたり。地急ぎ玉織姫を渡し覺悟せよと フシ罵れば。詞ヤア推參なる小二才め。敦盛卿の簾中に定まつた姫君樣。武者所でもむしやくしやでもけもない〳〵やる事ならぬ。地長居せば目に物見せん早く歸れと呼ばはつたり。詞ヤア延び過ぎた衒妻め。かたつぱし打殺せと。地下知に隨ふ家來ども拔連れ〳〵切つてかゝれば。心得多勢を相手にしてひるまず去らず三人が。蜘手かくなは十文字。或は大げさ車切。太刀長刀の稻妻に。こりや敵はぬといふやいな主

も家來もわれ一に。表をさして逃出づるをのがさじやらじと 三騎追うて行く。地跡に御臺はこれなう〳〵。長追ひ無用あぶないと。あせりながらも油斷なく。一間に飾りし弓と矢つがひ。立出で給ふ折も折。取つて返す成田の五郎。かけ向ふ出合頭切つて放せばあやまたず。胸板はつしと射ぬかれどうど倒れて死したるは。フシ言合せたる如くなり。地追々歸る女房達。此體を見てお手柄〳〵。あはれ成田が身の果とどよめく所へ又むら〳〵。討ち漏されの家來ども主人の敵と込入るを。詞イヤ面倒なと三人がまくり立てたる太刀先に。地刃向ふ者も嵐の木の葉ちり〳〵ばつと フシ逃げちつたり。地女房達聲々に。詞サア〳〵申し御臺樣。此浦船に打乘つて八島へ渡り殿樣に。尋ね逢はせ奉らん。地又も敵のこぬ内にオクリいざさせ。給へといさみ立ち。すゝめ申せど夫や子の。別れ思へば便なく足も。もつるゝ藤の方。フシ涙に袖を染衣が。勇んで見せる心は裏葉。げに武士の女房に敵も舌を槇の尾とふり。返つたる女武者三人四人が打連れて。歩めど跡へ引戻す濱の眞砂路つきせぬ思ひ通ふ。千鳥の浦傳ひ船場の。磯へと急ぎ行く。

## 第二

地酒極まる時は亂る。樂しみ極まる時は悲しむとかや。二十餘年の榮花の夢跡なく覺めて都をひらき。平家の一門楯籠る。詞須磨の內裏の要害。前は海上はけはしき鵜越。ナホス地大手は生田搦手は一谷の山手より。浪打際迄柵ゆひ廻し。赤旗風に吹靡かせ。參議經盛の末子無官の太夫敦盛。父に代つて陣所をかため フシ事嚴重に見えにけり。江戸頃は彌生の初めつかた。月さへ入りてくらき夜に。熊谷が一子小次郎直家。先驅して初陣のナホス地高名を顯はさんと出立つ姿は澤潟を。一しほ摺つたる直垂に。コハリ小櫻威の兒鎧。猪首に着なす星兜星の光りに只一騎。ナホス地心は剛の武者草鞋ハズミ足に任せてはやりをの。山道岩角嫌ひなく。一谷の西の木戸 フシ陣門に走りつき。地一息ついて四方をながめ。詞ハツア嶬しや我より一番に先驅する者もなし。地跡より人の續かぬ中切入らんとかけ廻れど。亂杭逆茂木透間なく。嚴しく戸さす陣所の門 スエいかゞはせんと見廻す內。遙の奥に管絃の音。ホフシ夜は深更に及んだり。地折節山路に風もやみ海上も波しづまれば。伎樂のしらべ哀れげに フシさも面白く聞えけり。地小次郎は思はずも心耳をすまし聞きとれて。詞アツア實にも上臈都人は。情もふかく心もやさしと父母の物語。地今こそ思ひ フシ合せたり。地か

かる亂れの世の中に。長地弓矢叫びの音もなく糸竹の曲をしらべ詩歌管絃を催さる。詞ハヽア床しさよ。地いかなれば我我は。邪見の田舎に生れ出で。詞鎧兜弓矢を取り。かくやんごとなき人々を敵として立向ひ。地修羅の劔をとぐ事は。淺ましさよとばかりにてスエテ覺えず涙を流したり。まだうら若き小次郎が。身の程程を汲分けて感ずる心ぞしをらしき。地後の方に蹄の音。誰なるらんと窺ふ内。平山の武者所馬上ゆゝしくかけ來り。小次郎が影見るよりも。敵か。味方いぶかしく。何者なるぞと聲かくれば。小次郎もすかし見て。詞ヤア末重殿かさいふ和殿は。コハ小次郎かと地馬よりフシおり立ち。詞フム我より先へ來る者はよもあらじと思ひしに。ホヽ心がけ神妙々々外の人なら平山が先陣を爭うて一番に乘入らんが。初陣の健氣さに先陣を汝に讓る。氣遣ひなしに切入れ〳〵。イヤなう平山殿。あの管絃の音御聞きなされ。扨も雲の上人は又やさしさが違ひますの。イヤサそれを和殿は得知るまい。昔諸葛孔明が司馬仲達に押寄せられ詮方つき。櫓にて香を炷いて悠々と琴彈いて居るを見て。謀もあらんかと我が智惠に迷うて仲達は逃げしと聞く。アレあの管絃も其通り。何怪しむことはない。はや驅入つて高名せよ。但し和殿がおそろしくば某が先陣せうか。何と地〳〵と持たされ。血氣にはやる小次郎直家。木戸口に走寄り。門打たゝき大音上げ。詞敵の陣へ物申さん。武藏國の住人私の黨の旗頭熊谷の次郎直實が一子同苗小次郎直家先陣に向うたり。平家方に名有る人々出あうて勝負有れと高らかに呼ばはれば。地門内も騷立ち。すはや敵の寄せたるぞ。出向うて討取れと。木戸押開けば小次郎は太刀拔きかさし駈入るを。ソレ通すなと軍兵ども俄に騷ぐ餘波。太刀音人聲かまびすし平山いかゞとためらふ所へ。熊谷の次郎直實。我が子の先陣心に徹しフシ足を空に駈來り。詞ヤア平山殿候な。悴小次郎見給はずやと地尋を待たずされば〳〵。詞最前是へ見えし故小次郎に色々段々。あの大勢の敵の中へ一騎打は敵はぬぞや。モひらによしに召され後詰を待つての事がよかろと色々にいさめても。地はやり切つたる若者無二無三に切込まれしと聞くより直實髮逆立ち。子を失ひし獅子の勢フシ敵の陣へかけ入つたり。謠爰やかしこの閧の聲。ナホス地聞くに平山獨りゑみ。詞ホウ思うたつぼ〳〵。親子共に袋の鼠今の間に討たれをろ。日頃からあの熊谷めと六彌太めが出頭を。くい〳〵と思うて居たに。エヽ時節もあればあるもの。手を濡さず風の神よりよい敵。

其の上親子も剛の者。死者狂ひと働かば。よつぼど敵も惱ましをろ。地あらごなしさせ討死さし。其跡へしかくれば高名手柄は思ひの儘うまいぞ。合〳〵。合〳〵とぞ〳〵勇み フシ悦ぶ所へ。地木戸口に數多の人聲。スハ敵ぞと身構し窺ひ居るも。くらまぎれ。熊谷次郎直實我が子を小脇にひんだかへ。陣門をずつとかけ出で。詞ナウ平山殿おはするか。悴小次郎手を負うたれば養生加へに陣所へ送らん。地お手柄あれと言捨てて フシ飛ぶが如くに急ぎ行く。地平山案に相違して油斷ならずと馬引寄せ。打乘る間もなく門内より數多の軍兵拔きつれて。我討留めんと驅出づれば。詞心得たりと拔合せ。受けつ流しつ多勢を相手。地火花をちらして挑む内。地無官の太夫敦盛は。爽かに六具をかため駒を進めて乘出し。地平山を見るよりも。詞まつしぐらに打寄せ給へばさしつたりと渡り合ひ地暫しは支へ打合ひしが。詞先を取られし武者所。殊に多勢に取卷かれ。地臆病神の誘ひてや。駒の頭を引返し行先知らず逃出せば。ヤアきたなし返せと聲をかけいづく迄もとあふり立て跡を。慕うて。三重、追うて行く。詞敦盛樣ア太夫樣いなう。この暗いのに只一人。あぶないはなうお歸りと。フシいへどあてども波近き。地磯端をうろ〳〵と袖は涙の玉織姫。夫を尋ね朧夜に心細身の一腰かい込み。あなたへ走りこなたへ迷ひ。すまの浦邊をそこよ。髮よと フシ尋ね。さまよひ給ひけり。フシ早しのゝめに人顏も。ほのかに見えし山道より フシ平山の武者所。漸く逃げのび須磨の浦。駒の足を休めんと フシ暫く息をつぐ中に。地玉織姫と見るよりも。やがて馬より飛んでおりつか〳〵と立寄つて。詞コレお娘。テモよい所で出會ひました。いつぞや京で見初めてから。目の先にちらつくやうで。起きても寐ても忘られず。思ひ餘つてそ樣の親御時忠殿へいうたれば。やらうとあるを幸ひに迎ひにやつた其跡でも。ア、生娘なら術ながら。マア寐てからどうしてかうしてと。ほんに〳〵どこもかも木のやうに成つて待つてゐたに。迎ひにいた玄番を殺しよう待ちぼうけに召さつたなう。サア地乘物の代り此馬に乘せ。連れていんで女房にすると。引立つればふりはなし。詞エ、あたいやらしい。親が赦そがどうせうが。敦盛樣とは二世の約束。かういふ内にも御行方を尋ね逢うて死なば一所。地邪魔しやんなと驅行くをひん抱へ。詞ム、敦盛を尋ねるのか。コレなんぼ尋ねても敦盛の行方。水の底迄在所は知れぬ。そりやなぜに。ヲ、敦盛はたつた今我が手にかけて討つて了うたヤアなんと。敦盛樣を

討つたとや。地ハアはつと計りにどうど伏し。人目もわかず ワシ 聲を上げ歎き。沈ませ給ひしが。地夫の敵と身構へし切付くる。腕首摑んでヤアこいつ手向ひか。詞モウ了簡ならぬといふ所を言はぬ。ても此手の柔らかさ尋常な事わいな。モどうもエ、武者震のする程どうもならぬ。コレ悪い合點ぢや。とんと心を入れかへ。地おれに隨ふ氣にならしやれ。女房に持つてかはいがるサ、。どうか〳〵と ワシ 猫なで聲。地姫の怒りの涙まじり。詞コリヤ世が世ならそちが樣なむくつけな侍は傍邊へも寄せつけぬに。隨への魔けのとは穢はしい忌はしい。地エ、腹立やと又切付くる。腕首捻上げ取つておさへ。詞サア女房に成るかならぬか。いやなら殺すが何と〳〵と。地太刀拔持つて傍若無人。ヲ、殺さば殺せ畜生め。エ、誰ぞ強い人が來て。こいつを切つてくれぬかと スエ もだえ ワシ 給ふぞいたはしゝ。地強氣の平山むつとせき上げ。詞ヤア、につくい女め。靡かぬ上に色々の雜言。恥面かゝされ堪忍ならず。地生置いて人の花と詠めさすもむやくしい。思ひ知れと持つたる刀。胸板ぐつと突通せば。ワシ あつと一聲苦しむ折から。地後の方に鯨波。すは又我を追ひ來るやと。駒を引寄せ飛乘つて逸散に其場遙にへ落失せけれ。詞去る程に。御船を始めて。一門皆皆舟に浮かめば乘り後れじと。汀に打寄すれば御座船も兵船も。遙にのび給ふ。地無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ。御座船に馳着いて。父經盛に身の上を告げ知らす事ありと。須磨の磯邊へ出でられしが。舟一艘もあらざれば ハズミ 詮方波に駒を乘入れ ワシ 沖の方へぞ打たせ給ふ。詞かゝりける所に後より熊谷の次郎直實。ナホス ヲ、イ〳〵と聲をかけ。駒を早め追つかけ來り。詞ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大將軍と見奉る。正なうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。斯く申す某は。武藏國の住人熊谷の次郎直實見參せん返させ給へと。地扇を上げて指招き ワシ 暫し〳〵と呼ばはつたり。地敵に聲をかけられて何か猶豫の有るべきぞ。敦盛駒を引返せば。熊谷も進み寄り。互に打物拔きかざし。朝日に輝く劍の稻妻かけ寄りかけ寄せちやう〳〵〳〵。合てふの羽がへし諸鎧。駒の足並かつし〳〵。合下ギかしこは須磨の浦風に。鎧の袖はひら〳〵〳〵。合群れゐる千鳥村千鳥むら〳〵ばつと引汐に。寄せては返り。返りては又打ちかくる虛々實々。勝負も果てしあらざれば。詞いそうれ組まんと敦盛は打物からりと投給へば。コハしをらしと熊谷も太刀投捨てゝ駒を寄せ。地馬上ながらむずと組

む。えい〳〵〳〵の聲の内。互に鐙を踏みはづし ツシ 兩馬が間にどうと落つ。地すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて抑へ。詞かく御運の極る上は。御名を名のり直實が高名譽を顯はし給へ。又今生に何事にても思ひ殘す御事あらば。必ず達し參らせん。地仰せ置かれ候へと懇ろに申すにぞ。敦盛御聲爽かに。詞ヲヽ、やさしき志。敵ながらあつぱれ勇士。かく情ある武士の手にかゝり死せんこと生前の面目。戰場に赴くより。地家を忘れ身を忘れ。兼てなき身と知るゆゑに。思ひ置く事。ツシ更になし。地さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞給はゞ嘸御歎き思ひやる。詞せめて心を慰む爲。討たれし跡にて我が死骸。必ず父へ送り給はれかし。我こそ參議經盛の末子。無官の太夫敦盛と。地名乘給ひしいたはしさ。木石ならぬ熊谷も スエテ見る目涙にくれけるが。地何思ひけん引起し鎧の塵を打拂ひ〳〵。詞此君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ。折節外に人もなし。一先髮を落給へ。早う〳〵と。地言捨てゝ。立別れんとする所に。後の山より武者所數多の軍兵。詞ヤア〳〵熊谷。平家方の大將を組敷きながら助くるは。二心に紛れなし。地きやつめ共に遁

すなと聲々に罵るにぞ。熊谷はつとばかりいかゞはせんと フシ 默然たり。地 敦盛卿しとやかに。詞 とても遁れぬ平家の運命。笑を助かり行先にて下司下郎の手にかゝり。死恥を見せんより早く御身が手にかけて。地 人の疑ひはらされよと。西に向ひて手を合せ。御目を閉ぢて待給へば。地 いたはしながら熊谷は御後に立廻り。彌陀の利劍と心に唱名。ふり上げは上げながら玉の樣な御粧ひ。情なや無慚やと。胸も張裂く氣後れに。太刀ふり上げし手も弱り。思ひにかきくれ討ちかねて フシ 歎きに時も移るにぞ。詞 ア、後れしか熊谷。早々首を討たれよと。地 捻向き給ふ御顏を見るに目もくれ心さへ。詞 悴小次郎直家と申す者丁度君の年恰好。今朝軍の先がけして薄手少々負うたる故。陣屋に殘し置きたるさへ心にかゝるは親子の中。それを思へば今爰で討奉らば。嘸や御父經盛卿の。歎きを思ひ過されてと。地 さしもに猛き武士も。フシ そゞろ涙にくれゐたる。詞 ア、愚や直實。惡人の友を捨て。善人の敵を招けとは此事。地 早首討つてなき跡の回向を賴むさもなくば。生害せんとすゝめられ。ア、是非なしと立上り。詞 順緣逆緣俱に菩提。未來は必ず一蓮託生。南無阿彌陀佛。南無

阿彌陀佛。ヲシ首は前にぞ落ちにける。地人の見る目も耻かしと御首をかき抱き。疊り壁をはり上げて。詞平家の方に隱れなき。無官の太夫敦盛を。熊谷の次郎直實討取つたりと呼ばはるにぞ。地磯に臥したる玉織姫絶入りし氣も一筋に。夫を慕ふ念力の耳に入りしかむつくと起き。詞ナウしばし待つてたべ。敦盛樣を討つたとは。いかなる人かナウうらめしや。せめて名殘に御顏を。一目見せてといふ聲も。深手にヲシ弱る息づかひ。地見るより熊谷御首携へ歩み寄り。詞敦盛を慕ひ給ふはいかなる人と尋ぬれば。地今はの苦しき聲音にて。詞我こそは敦盛の妻と定まる玉織姫。お首はどこに。エエもう目が見えぬと。撫廻せば。ム、何お目が見えぬとや。ヲ、いとしや〳〵。御首はコレこゝに。こゝにと手に渡せば。わつと泣く〳〵しがみ付き。膝にのせ抱きしめて消入り絶入り歎きしが。詞ナウこれ敦盛樣アはかない姿に成り給ふなう。陣屋を出でさせ給ひしより御跡したひ方々と。尋ぬる中に源氏の武士。平山の武者所。我を見付けて無體の戀慕。だまし討たんも女業。この如く手にかゝり。二人が二人で悲しい最期。せめて別れに御顏が。見て死にたいと思へども深手に心が引入つて。目さへ見えぬか悲しやと。又御首を撫でさすり。宵の管絃の笛の時後にとありし御詞が。今生後生の形見かや。此世の緣こそ薄くとも來世では末ながう。添ひとげてたべ我が夫と。顏に當て身に添へて。思ひの限り聲限り。泣くねは須磨の浦千鳥涙にひたす袖の海。引く汐時と引く息のヲシ知死期と見えて絶果てたり。地熊谷は茫然と。詞どちらを見てもつぼみの花。都の春より知らぬ身の今魂はあまさかる。地鄙に下りてなき跡をとふ人もなき須磨の浦。なみ〳〵ならぬ人々の成り果つる身の痛はしやとヲエテ悲歎の。涙にくれけるが。地是非もなく〳〵玉織のヲシ亡骸を取りをさめ。地母衣をほどいて敦盛の。御死骸を押包み。サハリ總角取つて引結び。手綱をたぐり結付ける。鞍の鞍やしを〳〵と。弓手は御首ヲシ携へて。地右に轡の哀れげに。檀特山の。うき別れ。悉陀太子を送りたる。車ト暦童子が悲しみも同じ。思ひの片手綱涙。ながらに。三裏へ歸りけり。地昔より爰も名におふ。津の國の。兎原の里に幽なる埴生の宿に獨居の。長地林は老の營みに糸針取つて人仕事つゞりさせてふ洗濯の。糊かい物を打盤の。手元も暗きヲシ黄昏時。ヲシ世のうきに。いさゝめならぬ身の願ひ。ヲシ忍びて人につげ櫛の。地薩摩守忠度は俊成卿の館より。須磨の陣所へ歸らんと。急ぎの道も行暮れて。宿もがなと爰かし

こ。ッエ荒れし軒端もまばらなる。伏屋の門に立寄り給ひ。詞都方より西國へ歌修行の旅の者。案内知らぬ道に勞れ。日も暮れたれば迷惑致す。率爾ながらお宿の御無心。賴入ると有りければ。ハア、いや爰は所の法度にて人宿は致さねども。我も人も行暮れて宿の無いは難儀な物。地殊更優しき歌枕。御修行のお方と聞けば別條もあるまい。宿はせずともマアはいつて。煙草でも參りませと。戸口を明けて。詞ハアお前はどうやら見た樣なお方ぢやが。ヲ、それよ前方都でお目にかかつた忠度樣でござりますな。ム、そなたは五條の三位に居た。菊の前の乳母でないか。成程々々。ハテ珍しや。お久しや。地先づこなたへと伴ひて。ッシ上座に直し手をつかへ。詞マア何か指置きお尋申しませうは。此度源氏の軍勢。平家を攻めんと都へ亂れ入るに付け。御一門殘らず西國へ落ちさせ給ふと承りましたが。お前ばかり何として今迄都にはござりました。ホウ其仔細は兼てそなたも知る通り。某は俊成卿の和歌の弟子といひ。分けて親しき中なるが。地此度師卿撰まれし千載集に。我が詠歌を加はりなば。たとへ敵の手にかゝり屍は野山にさらすとも。此世の本望數島の道を求めしかひならんと。思ふ心の一筋に。詞狐川より引返し。俊成卿の館に立越え願ひしが。かゝる時節に平家の詠歌私に加へん事もいかゞと。息女をもつて尋ねの爲源氏方へ送られしが。いまだ其沙汰なき内に。早や合戰最中と聞き心せかれて立歸る。地生田の陣所も程近しとは言ひながら。暮に及べば陣門も開くまじと。此所へ立寄りしも不思議の緣と宜へば。詞されば妾も幼なじみの夫が不所存。置去りにして行方知れざる折から。緣を求めて俊成樣へ乳母率公。養君菊の前樣御成人に就きお暇申し。かゝるべき悴も有つたれど。地性がわるさに勘當致し。今獨身の貧樂と應ぜぬ苦勞はござりませぬが。承ればお前と菊の前樣は。どうやら譯のある。ハア、いやお私に御遠慮はない事。それに就いてお話申す事もあれどこりやおつての事。地まあ〳〵遠路のお草臥。あれへどさつてお休みと。いふもやさしき待遇に。貧家の塵も繕はぬ。ヒロと主が案内に打連れて。ッシ一間にこそは入給ふ。ハルフシまだ宵ながら。かきくもる。空も心もコハリくら紛れ。うそ〳〵窺ふ大男。枳殼の生垣押破りぬつとはいつて上り口。納戸へしかけるヒロと指足ぬき足。ナホス忍び込む間に主の林。物音聞付け立出でて窺ひゐるともッシしすまし顏。地袋に入りし一腰かい込みギンそろり〳〵と表の方ッシ出でんとするを。詞コリヤ待てと。

擊かけられて惚りし。逃行く所を飛びかゝり。むしやぶり付いて引戻せば。地遁れんやらじと摑付き。引つばるはずみに頬かぶり脱げて落ちたる顏見付け。詞ヤアわりや太五平ぢやないか。ア、これ〳〵母ぢや人。擊高にいはしやんな。盗人を捕へて見れば我が子なりけりじや。人がしつては俺よりまあ。こなたの外聞が悪いわいの。テモさても憎やの〳〵。おのれがやうな性の悪いやつがあらうか。ハテあればこそ酒も飲みます。色事はこつち任せ。三絃もちつくりかじるてや。喧嘩もめつたに前先の見えぬ事はせず。又これ〳〵もあんまりにじりがすりはくひませぬわいの。ア、慮外ながら萬能に達した男。サア其悪い事が積つて親に様々難儀をかけ。妹娘を勤奉公にやつたも皆汝故。まだ其上は上蝨みかけ。盗みする様に成つたは。よく〳〵因果な生れ性。そしてまあ外でもある事か。親の内へ盗みにはいるとは。ア、これ〳〵。こなたもほんに年に似合はぬまだな事いはしやるわいのコレ他人の所へはいるとの。忽ち此首がどさらぬわいの。そこで若し見付けられても命に氣遣ひのない様に。高をくゝつて親の内へはいつたは。我が子ながらもア、發明な者ぢやと誉めてはくれいで。何ぢややらぐど〳〵〳〵と。愚痴な事ばかりいはしやるわいの。コレそんな事聞きや氣が盡きますと。地いひつゝ腰のすつぽんからありあふ茶碗へどぶ〳〵〳〵。詞ソレそれ〳〵其酒が止まぬから發つて横着な氣も出るわい。コリヤやい。見るかげもない此母がな。人仕事して漸うと其日を送れば。いかな〳〵一錢の貯も。サアあつてたまる物かいの。ない事はおれがよう知つてゐる。ぢやによつて錢銀の望はない。コレ此一腰がほしさに。イヤそりやならぬ。といはしやるは。エ、親父殿が殘し置かれた重代といふ事か。サアそれぢやによつてよう切れうと思うて。盗む心は。商ひせうにも資本はなし。仕覺えた職もなければ。人足廻しの茂次兵衛所にかゝつて居て。歩荷持しても。儲けにくい物は錢ぢや。それに毎日飯代を拂はにやならず。三文でも餘つた時はかたかはくんでやつてのける。是ぢや濟まぬと思ふからふつと氣の付いたは。今源平軍の中。うそ〳〵と見廻つて拾ひ首でもしたら知行に成るまい物でもないと。思ひ付きは付いても是も丸腰ではならぬ商賣。夫で此双物を盗むとはいふ物の。親の物は子の物ぢや。コリヤ貰ひますぞや。アレまだのぶとい事ばかり。子なれば遣れどわりや勘當したりや他人ぢやわい。サそんなら借ります。イヤならぬと。フシせり合ふ

中へによつと來る。人足廻しの茂次兵衛が。詞ハア太五平爰にか。ヤ婆様何やらせり合はしやるが。ア、扨は勘當の詫を聞くまいといふことか。イヤなう詫所ぢやござらぬ。やつぱり性根が。ア、コレ〳〵直らぬとはいはれまい。おれが世話にしてからめつきりとよう成りましたぞや。もう了簡してやらつしやれ。コリヤ〳〵太五平。うつかりとしてゐる所ぢやない。此度の軍に就いて弓持の鑓持のと大分人夫が入る故。それ〳〵の人を詮索してやつたが。まだ籤持がたらぬ故そちをやらうと思うて一遍尋ねた。外の事より辛どうはせいで。マア賃がよいがいかぬかと。地聞いて林が早や氣遣ひ。賃がようても軍場は命がけ。こりやよしにしたらよかろ。詞ハテやくたいもない。高で命に氣遣ひがあれば。雇はれる者は一人もござらぬ。あつちの手人と遠うて。道具持は切合の勝負はせず。若し流矢でもくれば。地楯の後へちやつと隱れる。詞婆様えいか。地鑓長刀がひらめけば。人の後へちやつとかゞむ。とかくちらほら氣轉きかして フシ立廻れば。詞怪我する事は微塵もない。ほんのこけ知らずといふ物ぢや。其段は此茂次兵衛が受合。コレ即ち先様からきた。丈夫な裝束見せましよと。フシ風呂敷ほどき取出すは。雜兵なみの陣笠鎧。見るに太五平ぞくつき出し。そりやおれが望む所ぢや。大勢に打交りえい〳〵わいが言うて見たい。ヲ、サそんならちやつと身拵へと。地てん手に帶とく布子ぬぐ。道具屋襦袢の上に黑革の。鎧上帶しつかとしめ。一腰さすが侍の小手脚當も似合うたと。陣笠着せて。詞コレ太五平。そちは先様知るまいから。鳴に所をヲット合點母じや人。ヲ、そんなら太刀の折紙を。添へてやらうと納戸より。取出し渡せば忝い〳〵。詞コリヤ怪我すなよ。ヲ、夫もよい〳〵此形も。よい〳〵やな。よい。よいやな。よい〳〵〳〵よいやな。地身ぶりは練物見る如く。オクリ勇み進んでフシへこそは急ぎ行く。フシ林は跡を。打眺め。詞不具な子がかはゆいと。有様は不便にござる。地とにもかくにもお前のお世話。忝うございます。詞お體がてらに酒一つ進ぜたいが。奥には仕事を取散らして置きました。納戸でなりと參つて下され。イヤそりや御無用。ハアテ買うては進ぜぬ。餘所から貰うた諸白に。鰯の肴でたつた一つ。地是非に〳〵と無理やりに。納戸へ押遣り勝手から。銚子盃持行くも。フシ子故の愛想と知られたり。地風さそふハルフシ道の時雨も。戀故に。身は濡鶯の菊の前。走著いたる一つ家の。門の戸けはしく打叩き。明けて〳〵と宣へば。林は閉付け誰ぢや

〳〵。イヤ 詞大事ない者ぢや。大事ない者とは。ハテわしぢや。菊の前ぢやわいの。ヤア。お姫様とは心得ぬと。地庭にかけおり戸を明けてほんにさうぢや。詞まあ〳〵お入り遊ばせと。地いふ中もどうやら氣遣ひ。見れば付添ふ人もなし。何として夜に入つてお一人お出でなされたぞ。詞さればいの忠度様の遊ばした。お歌の事にとやかくと際取る内を待兼ねて。お立ち有りしと聞くと早や跡を慕うて。地フシ出でたれども。地心に任せぬ女の足。爰迄來ても追付かれぬ。詞道は知らず日は暮れる。そなたの所は前方に。摩耶參りの時寄つたを便り。漸う尋ね當りしが此やうに後れては。忠度様に逢ふ事は。成るとも〳〵。そりや又どうして。コレ。忠度様は先程お出なされて奥にござる。ヤア夫はほんか嬉しや〳〵。早う逢ひたいあはしてたも。成程お逢ひなされませ。ぢやがコレ。旅草臥で休んでござる。けたゝましう起さずと。そつとはいつて肌身を付け。しつぽりと御寢なれと。地粋な詞におもはゆく。ヲ、乳母とした事がじやら〳〵と何ぞいの。わけもない事ばかりといひつゝ片頬に笑の眉。ひらく襖も待兼ねて。フシいそ〳〵として入給ふ。折節納戸の暖簾上げ。欠伸ましくら立出づる茂次兵衛。詞婆さま。いかい雜作でござつた。是は扨わしとした事が。不作法な亭主ぶり。イヤモ手酌でたべつおさへつ。銚子切り引つかけたりや履入がしてぐつたりと寢てのけた。内に大分用がある。いかい馳走。其内きましよと地言捨てゝ。とつかは急ぎ フシ立歸る。ハルフシ時しも一間。地騒がしく何の様子か菊の前。襖をあけの裾蹴はらし。かけ出で給へば林は驚き。コレ〳〵申しと引止め。詞何事が發つたか氣色をかへてとつかはと。お前はどこへござります。様子おつしやれどうぢや〳〵。サア其様子はの。忠度様がどうよくな。わしに暇をやるといの。ム、そんならお前のお腹立は尤もぢやが。高いも低いも夫が女房に暇をやるは。よく〳〵了簡ならぬ筋か。其譯を立てなされにや。コレ科ないお前に疵が付くぞヘマアとつくりと氣を鎭め思案して御らうじませ。イヤ思案迄もない。其譯は立つてあれど。詞互に思ひ初めしより夫よ妻よと言ひかはし。一生添はうと思うた物。緣切れては片時も何と存らへ居られうぞ。恨みつらみもありそ海一思ひに身を沈め。底の藻屑となる覺悟。とめずと殺してたもいなう。死ぬる〳〵とばかりにて。フシ跡は詞も涙なる。イヤ〳〵詞何ぼさうおつしやつても。乳母はどうも合點がいかぬ。是には定めて深い様子が。ホウ其仔細は忠度が。とくと申

聞かせんと。地しづ〳〵と立出で給ひ。詞天の憎む所天必ず誅討すと。入道の不善一門の積惡によつて。かく迄傾く平家の運。地此度の戰ひも十が九つ味方の敗軍。某も討死と覺悟極めし事なれば。詞いつを期してか添果てん。思ひ切つて歸られよと。いへども中々聞入れず。陣所へ伴ひ行かんとある。時には忠度女に迷ひ陣中迄俱したりと。世の人口にかゝるといひ。死後迄緣を切らざれば。地俊成卿の御身の上。平家に親しき咎を受け。終には源氏の仇となつて亡び給はん悲しさに。詞態と難面くいひ放し。暇をやりしは忠度が。師の厚恩を報ぜん爲。恨みと思ひフシ給ふなよ。地とはいへもしも運に叶ひ軍に勝たばながらへて。再び逢はんも計りがたし。詞それを賴みに行末の。契りを樂しみ待給へと。地口には諫め心には。これ今生の別れぞと思ひ廻せばいぢらしく。さしも武勇に張り詰めし。弓弦の切れし心地にてゐるもゐられぬ座を背け。脇目に餘る御涙フシつゝみ兼ねさせ給ふにぞ。地それと悟りて菊の前。イヤ〳〵詞何ぼ其樣に。再び逢ふの添はれるのと。潔うおつしやつても。誠しからぬ身の覺悟。地討死と知りながら何と見捨てゝいなれうぞ。いづく迄もお供して生きるとも死ぬるとも。一所でなけりやわしやいや〳〵。むごいつれないお心と。縋り付いて泣き給へば。林も心根思ひやりスエテ俱に袂をしぼりしが。地態と勇めの聲勵まし。詞今の程事を分け。利害を說いて言ひなさるに。たつてお供とおつしやれば。親御樣へは不孝といひ。殿御の爲には猶ならぬ。地いかに姫ごぜなればとて其辨へがないかいなう。アゝうとましいお子ではあると。詞を盡して俱々に諫めすかせどいやおうの。應も涙中々に離れがたなきフシ風情なり。地折節風に誘はれて。間近く聞ゆる鯨波。耳を突拔く鉦太鼓。鼙鼓に打立て〳〵。どつとかけくる討手の大將。眞先に大音上げ。

切り平家の落人薩摩守忠度。此家に忍びおはする由。注進有つて慥に聞き。召捕らん爲梶原平次景高が向うたり。縱へ鬼神なればとて。八方を取圍めばとても遁れぬ。尋常に縄かゝられよ。異議に及ばゝ踏込んで搦捕る。地いかに〳〵とフシ呼ばはつたり。地人々扨は茂次兵衛が。注進せしかと驚けば。ノル地忠度ちつとも動じ給はず。二人を奥へ忍ばせて。太刀おつ取つてつつ立上り。ヤア詞をこがましや景高。源平互に鎬を削り双を爭ふ戰場には向はず。我一人に多勢を以て取圍む卑怯者。汝如きにやみ〳〵と縄かゝる忠度ならず。地いでや手並を見せんずと。太刀拔放しフシ身繕ひ。地景高苟つてソレ

踏込め。下知に從ふ雜兵共。門の戸蹴破り一同に。かけ入り〳〵かけ向ふ。多勢を屈せぬ早業に眞甲。立割車切。四方八方ばつし〳〵。薙立て給へば雜人ばら。フシ皆我一に跡ずさり。詞忠度怒りの御聲にて。うぬら如きに双物はいらずと。地大手を廣げ待給ふ。ハルギン手並にこりぬ雜兵共。一人がかりは敵はじと。大勢一度にどつと寄る。引摑んでは人礫。あやどりなんどを見る如く目覺しかりける　三重〻次第なり。地勇力無双の働きに。さしもの景高氣後れし。逸足出せば雜兵ども。敵はじものといふ波の。立足もなく我先に。むら〳〵ばつと。フシ逃失せけり。地相手なければ忠度卿。息を休むる其中も油斷ならざる埴生のやどり。いかゞして防がんと。心を配る時しもあれ。地又も寄せくる関の聲貝鉦。鼓攻め太鼓。　フシ手に取る如く聞ゆれば。地忠度はつと心付き。詞扨こそ景高。大軍を催し重ねて向ふと覺えたり。戰場ならば敵の勢。何萬騎にて圍むとも打破り驅惱ませ。譽を顯はし見せんずもの。地軍中に引返し願ふ詠歌も腰をれの。望も叶はず剩へ。さしも名高き忠度が。斯く荒屋に身を忍び。敵に圍まれやみ〳〵と。生捕られんは後代迄。屍の耻辱名の穢れ。ヱ、口惜しや淺ましやと。拳を握り齒噛をなし怒りの涙てる月に。電を降らすが如くにて　ノルフシいたはしく。も亦道理なり。コハリ地透もあらせず表の方。寄せくる軍兵むら立つ提燈天地を。てらし亂れ入るよと見る所に。ナホス地さはなくして討手の大將。掛烏帽子に花田の大紋さはやかに。長袴のくゝりをとき悠悠然と立向ひ。詞武藏國の住人岡部の六彌太忠澄。忠度卿に見參と。地しづ〳〵と打通り傍近く謹んで。詞此度源平兩家の軍は。私ならぬ院宣を蒙り。範頼義經龍向へば。兩陣互に晴勝負。潔き軍はせずして。拔けがけせし景高が卑怯の振舞。聞くに忍びず此六彌太が參りしは義經の嚴命。其仔細は。先達て俊成卿へお頼み有りし御詠歌の內。さゞ波や。志賀の都はあれにしを。昔ながらの山櫻かな。右の御歌千載集に入りしかど。勅勘ある御身なれば。名は憚りて。讀人しらずとなりし趣。則ち集に入りたる印。此短冊御覽に入れよと。地山櫻の流枝に。結び付けたる以前の短冊フシ恭しく差出せば。地忠度につこと打笑み給ひ。詞我が詠歌を我筆の。願ひも仇花ならぬ印。御芳志の山櫻。ハア、忝しと押戴き。敵味方と隔つれば打捨置かるべかつしを。思ひ寄らざる義經の仁心にて。歌人の數に加はり。和歌の譽を殘す事。生涯の本望死しても忘れぬ。フシ悅びぞや。地とても遁れぬ身の不運。死すべき時に死せざれば。死に勝る恥有

りと。名もなき愚人の手にかゝり。見苦しき最期もせんかと。後悔せし折に幸ひ。詞武勇の聞え隠れなき。六彌太に生捕られば忠度が恥辱はあらじ。サア。依て縄かけられよと。地フシ御手を廻し待給へば。コハ詞心得ぬ御仰せ。某君の討手には参らず。敵味方の勝負は戰場。其時は両家の晴業容赦はないぞ。互に時の運に任せん。但し梶原が如き弱みを見かけ。抜駈して手柄にせんと。思ふ様な六彌太と思召さるゝか。ハ、、、地フシはつとあざ笑へば。地忠度卿理に服し。詞實に〳〵是は誤つたり。盛んなる時は制し。衰ふる時は制せらるゝ理。いかなれば義經といひ汝迄誠有る一言。心魂に徹して今さら返す詞もなし。地惜しからぬ命なれども明けなば陣所へ立歸り。花々しく軍をせん。其時望みは御邊が首。忠度卿は我討取る。必ず討たれよ。おんでもない事。アレ〳〵八聲の鶏も鳴く。明くる間近しと申せども。路次の狼藉覺束なし。陣所へ御供仕らん。ソレ〳〵用意の馬引けと。地飾立てたる黒の駒。御前に差寄する。辭するに及ばず忠度卿。立髪掴んでゆらりと召せば。地一間の内より菊の前。コレなう暫しと駈出で給ふを林は押とめ。立身で隠せば岡部の六彌太。夫と悟つて忠度の。脱ぎかけ給ひし上着の袖。刀を抜いてふつつと切り。詞コレ〳〵乳母といふに悔りハテ扨。詞ふしぎな顔せまい。總じて老女は嫗といひ。又姥とも呼ぶ。今宵忠度卿の。お宿を申せし御褒美に是を遣はす。それとも。若々しき錦の片袖。年寄が貰うて益なしと思はゞ。外にほしがる方も有るべし。是も其。人の形見と思へども。猶なつかしき袖のうつり香といふ歌の心。ナ。其方が耳にソレ。菊の前よく心得て地お受け申せと差出せば。地コハ冥加なき仕合と。戴く右の片袖は右の腕を落ちかたの。軍に討死し給ひし。フシ後の哀れとしられたる。ハルフシ思ひの種や涙の種。仁義を種の六彌太が。東雲近し急がんと先に進んでたつか弓。いはぬはいふにいやまさる暇乞さへ泣顔に。見送る姿ふり返る心の種の詠歌も昔ながらの山櫻。散行く身にも指かざす流の枝の短冊は。世々に譽を殘す種。歎きの種の離れ際。諌めを種と隔つれど。はてし涙の悲しみを俱になづみて耳を垂れ嘶く。聲も哀れそふ駒の。足取り諸手綱引き。わかれ行く曉の空も。名殘や惜むらん

## 第三

歌世にあらば又歸りこん津の國の御影の。ナホス松と詠み置きし。地一樹と俱に年を經し額の黒痣口癖に。佛の御名を唱ふれば。白毫の彌陀六と。人に知られし石屋

有り。實に交りも信心の同氣同行相求め朝暮。勤むる看經の責念佛の終りには。諸國諸山に建置きし石塔にある戒名の。數も限りもなむあみだ。願以此功德平等の回向の聲も殊勝なり。地日暮紛れに門口へ連立つてくる石屋とも。親父殿内にかといふ聲聞いてずつと立出で。詞ホウ同行衆ようござつた今日は大分閙しさに仕事の形で直に看經たつた今了つた。サ、上らしやれなむあみだ〳〵。アイヤこれ彌陀六殿。今夜は數珠くりの數右衛門が逮夜。百万遍申すによつて誘ひに來ました。ほんにさうぢやどりや參りましよコリヤお岩まだ彦助は戻らぬか。ソレ娘が起きたら藥あたゝめて飲ませ。若し石塔を誂へさしやつたお若衆が見えたら戻る迄待たして置け。サア〳〵ござれちやつと念佛かき込んで夜食を申そぢやあるまいか。ヲイ〳〵佛も百味の飲食。こちも奈良茶の御食せう。しよさい佛法腹念佛。地門念佛を口々にフシ打連れてこそ急ぎ行く。地跡へ下人の彦助が枋の先にぶら〳〵とフシ網繩引きかけ立歸り。詞ヤレ〳〵しんどや。お岩殿肩も腕もめり〳〵いふわヲ、道理々々さぞ草臥。そして石塔は建ちましたか。イヤまだ建てはせぬが。おりや内に用があろと思うて先へ戻つたが旦那殿は奥にか。イヤ〳〵同行中に百万遍が有つて參らしやつたわいの。ホウそんなら幸ひ。此間小雪樣が病氣ぢやとて引込んでござるは。彼の石塔を誂へさしやつたお若衆に。戀煩ひと見たは違はぬ。旦那の耳へ入らぬ内意見せうぢやあるまいか。イヤそりやわしも如才はない。此間から色々というてもいかな〳〵。此戀が叶はねば井戸へ身を投げるの首しめて死ぬるのと怖い事ばつかりいうてぢや。ホウそりやいやなこつちやの。ハアそんならかうぢや。たつた一度で思ひ切らしやれと。とつくりと合點さしていつそ逢はそぢやあるまいか。ハテもうせう事がない幸ひ今夜お若衆が見える筈ぢやが。其間に旦那が。ア、何のいの百万遍ならちやつとぢや有るまい。マア娘御に其譯いうて工面さつしやれ。おりや寐所で彼の時分。獨角力を取りましよと地言ひつゝ勝手と奥の間へ。フシ別れてこそは入りにけれ。伊太夫既に其夜も。丑三つの。風しん〳〵と更渡り。スエいと物すごき時しもあれ。音取の聲の哀れげに。ほの聞ゆればいとゞ猶。心ぼそさとフシ訝しさ。地小雪は部屋を立出でて灯火かゝげ窺へば。門の戸ほと〳〵打叩き。詞頼みませう地〳〵といふ聲は紛ふ方なきお若衆樣。ヤレ嬉しやと飛んでおり。戸口を明けてようこそお出で。サア〳〵こちへと伴うて下に居る間も胸せかれ顏は上氣のはち

艶。差俯向いてもぢ〳〵と。挨拶も出ぬフシ其内に。地お岩が聞付け走出で。詞是は〳〵お若衆様。今日お出の約束故只今迄待ちましたが。なぜ更けてお出なされた。されば手前はちと様子有つて人目を忍ぶ者なれば。畫は勿論夜とても密な時刻を心がけ。態と只今參りしが先達て誂へ置いた石塔が出來ましたら。彼地へ建てて貰ひたさ。先づ御亭主に逢ひましたい。イヤとゝ様は只今留守でござりますが。お前がお出でなされたら待たせまして置く様にとナウお岩。アイ申付けて出られました。歸られます迄名代は此娘御。お咄の相手にしてうつゝ答へつやつつ返しつ。地とかくお心安うして進ぜて下さりませ。サア〳〵奥へと フシすゝむれば。詞然らば左様致さんと。地何の心もついて立つて。一間へ通る後かげ見送るお岩が手を打つて。詞テモ扨も好い器量。あの様なお若衆は日本國を尋ねても今一人と有るまい。惚さしやんすも道理々々。したがコレ小雪様うろ付いてござる所ちやない。ちやつといて教へた通り何かなしにあたまから抱付いてこけたがえいぞや。夫も上へならぬやう下から隨分あしらひなされ。地アレまだうぢかはもどかしやサア〳〵早うとむりやりに。押しやり突きやり跡びつしやり。詞ア、世話やのどうやらかうやら首尾なつた。地是から休もと儘なれどたつた一重の壁ごしに。隣の餅搗聞くやうで寐られそむない夜さりぢやと。フシいひつゝ勝手へ入る跡へ。地小雪は立出で興さめ顏。詞テモめんえうなお若衆様。慥に奥へいかしやんしたがかいくれ姿が見えぬはどうぢや。地不思議〳〵とうろ〳〵きよろ〳〵尋ねる内。こなたの障子さつと明け。詞イヤ爰に居ますわいの。是はしたり意地の惡いいつの間に拔けなさつた。人の思ふ様にもない心つよいお方ぢやと。地言ひつゝ傍へ指寄れば飛びしさつてア、これ〳〵。詞始終の様子を見聞くに付け。優しき人の志。嬉しいとは言ひながら。我が身は深き様子有つて假にも妹脊の語らひをなす事叶はず。地緣なき事は前生の。約束ならめと諦めて思ひ切つて下されと。いふもさすがに氣の毒の。フシ打しをれたる其風情。地小雪ははつと力を落し。サハリたとへ様子があるとても。是程に思ひ詰め心を盡すかひもなく。情なうも振捨てていやとおつしやりや生きては居ぬ。むごいつれないお心とスエテ恨み歎げば。詞いやとよ恨むはさる事ながら。逢ふは別れの始といふ例に洩れぬ我が身の上。賴み置きたる石塔が今にも成就してあらば。再び此家へ來らぬ故逢見る事も叶ふまじ。地只儘ならぬは世の習ひはかなき

物は人の身の。一生は皆夢と思へばさのみ迷ひも有るまじ。さりながら今を限りの別れといへば。誰しも名殘惜しい物。若しも戀しき折からは。詞心のいさめともならん。いで〳〵形見を參らせんと。地錦の袋押開き青葉さかえし笛竹を。渡す心もあぢきなく戴く身にもさながらに道理に向ふ矢先はなく。ひよんな事ぢやといふより外ッシ詞も。涙にくれゐたる。地折から道々口癖に南無阿彌陀。なむあみだ六逮夜よりいきせき戻り門の戸を。明けい〳〵と打叩けば。あいと奥から返事してお岩がかけ出で。詞旦那樣のお歸りさうなコレ小雪樣。折角戀になされたあなたを。此儘で思ひ切るお前の心がいかにしてもいとしぼい。地せめてもの心ゆかし此間にちやつと抱付きなされと。むりに押遣り庭に下り戸口を明け。詞ホウ旦那樣早かつた。何の早かろ。百万べん〳〵だら〳〵と跡の話で途方もなう夜が更けた。アなむあみだ〳〵。ヤお若衆はござつたか。サア其お方は。どうぢや〳〵。サヽ、さつきに見えたけれど。耻しかつたか門口でうぢかは〳〵はいりにくさうにしてで有つたを。もどかしがつて娘御がついはいらしなされたわいな。ヤ、、何ぢや娘がもうはいらしたか。アイ。なむあみだ〳〵。ヲ、旦那樣とした事が悪い聞きやう。此門口にござつたを内へはいらしなされたといふこつちやわいな。ハテさうしつかりといへばえいにどうやら紛はしかつたではつと思うた。地どりやお目にかゝろかとずつと通つて是は〳〵。詞さぞお待遠にござりましよ。扨お詣への石塔。今日の約束なりや夜を日に次いで漸う出來し。今朝から若い者等に運ばせたが。大かた建てたでござりましよ。それは嬉しやいかい世話でござつた。イヤ世話は家業ぢやがお氣に入つたらこちも仕合。マア御らうじて下さりませ。成程々々同道して參りたい。そんならお供致しましよと。地立つて用意を取急げば。詞コレ〳〵と、樣わしも一所に行きたいわいな。そりや何で。ハテ石塔の恰好見に。ハテ扨わけもない何のわれが見る事で。笑やあそこの所ぢやなし殊に夜道ぢや。阿呆いはずと背戸門しめてよう留守せい。コリヤお岩。そちも傍から隨分氣を付け誰が來うとも構へてついはいらすなよ。合點か地サア〳〵お出と打連れ立ち急ぎてこそはへ出てで行く。ハルフシ月もさやけき夜もすがら。四方の景色もすみのぼる。光りを覆ふ雲ならで。雀のやどり影暗き。木フシ松の林に風あれて。汀の波のおのづから音もはげしくフシ打寄せて。地高根に響くコハリ山彦は。とう〳〵さつと布引のナホス瀧の。しら糸

たえずと人の。とへばかなたと五百崎にオクリつゞく。藪池村里も。急ぎて切利天上寺。摩耶のお山を馬手に見て。行く道筋も直ならぬ脇の濱邊や磯傳ひ。神戸も跡に湊川ハルフシ流るゝ水の淀ならば爰も纜橋かけ渡す フシ舟を守りの神垣や 地森もしげみて置く霧の。垂水の里も早過ぎて行けば。程なく上野山 フシ一の谷にぞ着きけるが。 地東雲近き横雲のたなびく空も青々と。枝葉しげりし松蔭につつくり立つた御影石。遠目にそれと彌陀六が。走寄つて是ちや〳〵。 詞先達て遣はされた所書に合せ。若い者等に言付けたりや建ては建てたがちつくり笠にふりがあると。 地押直してためつすがめつ。 詞サア恰好見て下さりませ。何とようどざりませうがや。是から狂ひのない樣に腸を合すは漆喰と。 地懐より蓋物取出し。重ねの際々塗る所へ。山畑かせぐ百姓ども。鋤鍬かたげどや〳〵と通りかゝつて。 詞ホウ石屋の親仁殿か。おいやいこりや皆とうから精が出るな。イヤこちとらより此方がとうからあぢな所へ石塔を建てさしやつたの。ハテあの人は商賣ちやにようつて。どこで有らうが持運んで建てねばならぬが。 詞人が希有なやつぢやの。アアこれ〳〵むさと麁相言ふまい。其施主人が爰にござるぞナアお若衆樣。我も人も亡者の爲卒都婆一枚立てても三惡道を遁るゝといふ。まして大層な此石塔をお建てなさるは御奇特なお若衆樣。結構なお志でござります。イヤこれ親仁殿。お若衆の施主人のと人もないにそりや何いはしやる。何とはわいら目が覺めぬな。アレまたどこに人がゐるぞいの。ハテこれ爰にハアほんに見えぬわ。ハレめんえうなたつた今迄爰にで有つたが。ハアどつちへござつたな。お若衆樣〳〵と 地呼べば俱々百姓ども。爰かそこかと尋ぬる所へ。娘の小雪がかちはだし息もすた〳〵 フシ走り着き。 詞お若衆樣にたつた一言いひたい事が有つてきた。 地ちよつと逢はして下さんせ。 詞イヤ逢はして所ぢやない影も形も見えぬわい。コレ親父殿。お若衆がゐやらねば忽ち此方の損ぢやぞや。所を知つてか。但し先銀でも取つて置かしやつたか。いやてや。仁體が好いから所も問はず一錢も受取らなんだ。ハア夫でよめた。石塔をかこ付に何ぞせしめる下工。扨は騙に極つた。 詞遠くはうせまいぞつかけんサア皆こい〳〵と立騒げば。 詞イヤこれ〳〵待たしやんせ。よもやそんなさもしい心なお方ではあるまい。其證據はわしにやるとて。コレ此笛を。貰うたのか。ハアどれ〳〵。ヤこりやまあ袋が結構な赤金襴ぢや。扨笛は生竹でもないが節からちつくり枝葉がある。

いか樣是を錢にせうなら百が物はあらうかいナウ親仁殿。ハテ扨何の錢にならう夫も娘が一杯喰たのぢや。エ、こんな事ならあたまで半銀取つて置いたら。まんさらの損もせまいにあた惨たらしい目にあうたと。文場悔むにかひもあら笑止や。彌陀六がぬかれたと傳へて諸事の詫物。手附を取るといふ事はフシ此時。よりと知られたり。ナホス場時しも跡の松原より足早にくる女子は。何者成るといふ中に走り。近付き藤の局。詞コレ〳〵ちよつと物問はう。船寺はどつちぢやの。場教へてたもとありければ。詞ハア、夫は是からよつ程遠いが。見れば賤しうない女中の。たつた一人かちはだしで何故寺を尋ねさつしやる。されば妾は樣子有つて跡より追手のかゝる者。暫く影を隱さん爲と。場宣ふ中に目早くも娘が持つたる袋を見付け。詞なうそれちよつと見せてたべと。場手に取給へば紛ひなき青葉の一管。詞ヤア是は我が子の敦盛が肌身放なさぬ秘藏の笛。どうして此方の手にあると。場聞いて親子も不審顏。百姓ども口々に。詞其敦盛といふ人は。此間の戰に。源氏の侍熊谷の次郎が手にかゝり。死なしやつたちやないかいナア與次郎。ヲ、其時にいぢらしい玉纒とやらいふ内裏上臈も殺されて居たげなと。場聞いて御臺は。詞ヤア〳〵〳〵なに敦盛は討たれしとや。福原の館にて母樣御無事でおさらばと玉纒諸共いさぎよう。場いうたが此世の暇乞。長い別れに成つたかと。ありし事ども くどき立て。人目も耻じぬ叫び泣き前後。不覺に見えにける。詞イヤこれ親仁殿。合點のいかぬ事がある。死なしやつた敦盛樣があの笛の主なれば。こなたに石塔誂へたお若衆と一つぢやないか。いかにも。サ其死んだ人が來さうなものぢやないぞや。いかにも。ハ、ア聞えた。さつきに爰迄連立つて來て。あのゝ物のいふ中搔消す樣に見えなんだは。扨は幽靈であつたよなと。場いへば皆々興さめ顏御臺は猶も悲しさのスエテ思ひいやます御歎き。小雪も始終を聞くにつけ。儚い事やとばかりにて。フシ俱に袂をしぼりける。場折ふし遙の松蔭よりむら〳〵鳥の搏つが如くかけくる大勢彌陀六が。あれこそ慥に追手の者。先づ〳〵あなたを隱すに幸ひ。此石塔の後へとフシ御臺の手を取り忍ばせて。詞何と思やるいづれも。追手の奴等が此所をすなほに通ればあなたの仕合。若しも何かと意地張らば。是迄平家の領地に住んだ御恩の爲。一働せうぢやないか。ヲ、サてん手に鋤鍬の。背打くらはせぼひまくろと。場いふ間もあらせず砂煙蹴立て踏立てかけくるは。梶原が郎等番場の忠太須の股運平先とし

て。數多引連れつつと寄り。詞コリヤ〳〵百姓ども。三十餘りの女一人此所へきたであらう。どつちへ逃げたそれぬかせ。ハア成程々々。其女はアレ。あの道を横切に。濱邊傳ひに走つたがア、もう二三里も行きませう。追手の衆なら一足も地早うごされとッシ急すれば。地扨こそ遁すな皆來いと。駈出すふりにて立留り。運平が耳に口。牒し合せて木蔭に殘しッシ濱邊をさしてかけり行く。地跡打眺めサア樂ぢや。此間に早うと御臺を出し。詞コリヤ〳〵娘。あなた一人は覺束ない。寺迄送つて内へいね。地ちやつと〳〵といふ所へ。思ひがけなき木蔭より須股運平飛んで出で。詞ヤアどこへ〳〵かうあらうと推量し。忠太が我を殘し置かれた。サ、早う御臺を渡せ。邪魔ひろぐとかたつぱし。そつ首ころり打落す何と〳〵と罵れば。地百姓共せゝら笑ひ。詞コリヤやい。そつ首のそつくひのと。わいらがほでの動く間にうつかりとして居ようかい。サア相手仕事ぢや手早にこいと。地てん手に鋤鍬大熊手。打つてかゝれば運平始め。數多の家來も一同にッシ拔連れ〳〵渡り合ひ。地打合ふ際に彌陀六が。ソレ御臺樣逃げた〳〵。娘も逃げよとあせる中。元來達者の百姓ども。腕先揃へて連枷打。かたはし家來を打殿り。運平を追取捲き。詞投げたり踏んだり蹴飛したり寄つてかゝつて打叩く。地急所にや當りけんッシうんと仰向に反返れば。地ソリヤ死んだはと逃行く家來。又追つかくるを彌陀六が。コレ〳〵待つたと呼返し。詞御臺の雛儀を救ふ爲。ぱつ散らす計りでよいにア、死んだりや尻がむつかしい。コリヤまあどうした物であろ。どうというたら逃げたがよいサア皆ごされといふ所へ。地駈つて來る庄屋の孫作死骸見付けて扨こそ〳〵。詞一人も散らす事ならぬぞや。コレ皆よう聞きやれ。今梶原樣の郎等番場の忠太といふお侍がござつて。百姓共が狼藉し家來運平を殺したる由憎いやつ。殘らず引立て來るべしと嚴しい言付。ア、ひよんな事しておらに迄厄介をかける。遲なはつたら猶こはい。サア〳〵地おぢやといふに皆々尻込の。中に彌陀六進み寄り。詞殺したと聞かしやつたは大きな間違ひ。ありや目が眩うて死んだのぢや。其證據にはソレ。死骸に一つも疵がない。ムウそれが定ならおらも嬉しい。地ドレ〳〵と身體を改め。詞ほんにどこにも疵はない。こりやあつちのが大きな龜相。ハテそち達が殺さぬからは何のこはい事はない。此中でよう物いふ者たつた一人居て。さつぱりと言譯すりや濟む事ぢや。ほんにさうぢやハア誰がよかろなア。いやこれ年の功ぢや

彌陀六いかしやれ。イヤ行く分は構はぬがおりや口癖の念佛が邪魔に成つてどうもならぬ。そんなら此庄屋が指圖せう。日頃ちよびくさようしやべる雀の忠吉やらうかい。イヤわしやあんまり口早で何のこつちや譯が知れまい。扨はびしやの五太右衛門かい。おりや聲が鼻へ入るぞ。というて丹兵衛は咽がごろつく。與次郎は齒脫なり。指詰又平おいきやれ。イ、いやコ、こちやド、どもりますわいの。ハテ扨其樣に讓合つては埒が明かぬ。幸ひ爰に石を運んだ繩がある是で鬮取したらよかろ。ヲ、そりやいやおういはさぬやう此庄屋がしてくると。フシ手早に繩切り後でもちやくちやひん握り。詞コリヤ結んだのを取つた者がいくのぢやぞ。サアとれいもよ。ヲツト市嚊どれとりやる西國廻つて是々と地てん手に繩先引つぱれば。詞ハア、頭數よんでしたがコリヤ一筋餘つたわ。ハテそりや親の繩ぢや庄屋殿とらしやれ。ほんにさうぢやおれが取ろ。サア引け〳〵かたはしからいなしてくりよ。ヤすつとせい。〳〵。ハア悲しや結んだのはおれぢやあつた。サア庄屋殿いかしやれ〳〵。イヤ待てよ。おりやいかう筈がない。此場の樣子を知つてゐるわいらが言譯する筈ぢや。デモ鬮が當つたもの。そんならも一度。イヤ仕直しはならぬ〳〵無理いはずといかしやれと。地寄つてかゝつて引立て押立て。詞ヨイハサツサ。是は迷惑。ヨイヤサツサ。待つてくれんか。ヨイヤサツサ。了簡ならぬか、ヨイヤサツサ。あんまりどうよく。ヨイヤサツサ。おつ立てひつ立て。ヨイヤサツサ。地て。ヨイヤサツサ。こヨイヤサツサ。そ。三更へ行空も。地いつかは冴えん須磨の月。スエテ平家は八島の浪に漂ひ。ギンオクリ源氏は。花の盛を見る中に勝れて熊谷が。陣所は須磨に一構。フシ要害嚴しき。逆茂木の中に若木の花盛。八重九重も及びなき。それかあらぬか人毎に。フシ熊谷櫻といふぞかし。地花折らせじとの制札を讀んで行く人讀めぬ人。一つ所に立集り。詞さても咲いたり〳〵。花より見事な此制札。辨慶殿の筆ぢやげな。扨も見事一つも讀めぬ。ヲヲあれはの。養經樣が此花を惜み。一枝切らば指一本切るべしとの法度書。ヤア花の代りに指切ろとは。首切る下地ヲ、こはや。地見てゐる中も虎の尾を踏む心地する皆ござれと。花に嵐の臆病風フシちり〳〵にこそ別れ行く。ハルフシはる〳〵と。地尋ねて爰へ熊谷が妻の相模は子を思ひ夫思ひの旅姿。陣屋の軒を爰やかしこと尋ねしが。幕に覺えの家の紋。フシ嬉しや爰と內に入る。地折節家の子堤の軍次立出でて。是は〳〵奥樣か。詞ヲ、

軍次そなたも息災さうな。マアめでたい〳〵。熊谷殿や小次郎も變る事はないかの。早う逢ひたい逢はせてたも。ハイ旦那は今日御廟參。小次郎様は先頃より御前勤めで御下りなし。地マア〳〵長の御旅路お疲れをお休めと。フシ挨拶とり〴〵なる所へ。地敦盛卿の御母藤の局虎口の難を遁れ來て。こけつ轉びつ花の蔭。陣屋をめがけ走着き。詞跡より追手のかゝる者影を隱して給はれと。地險しき體に驚きて相模は傍へ走寄り。見るに見かはす互の顏。詞ヤアお前は藤のお局様ではないか。さういやるそなたは相模ぢやないか。テモ久しやなつかしや。地おゆかし様やと手を取つてマアこなたへと伴ひ入る。親しき體に心を利かし フシ軍次は勝手へ入りにけり。地相模はやがて手をつかへ。詞誠に一昔は夢と申すが。大内に御座遊ばす時。勤番の武士佐竹次郎殿と馴初め。御所を抜出で東へ下り。お前様のお身の上を承れば。御懷胎のお身ながら平家の御家門。參議經盛様方へ緣づき給ふとの噂。其折は世盛の平家。御威勢は益々と險ながら悅びましたに。此度源平の戰ひ。御一門も散々と聞くに付け。ア、此藤の方様は何となされたどう遊ばしたと。一人苦にしてをりましたに。マア御機嫌なお顏を見て。おめでたやお嬉しや。ヲ、そなたも無事でマア嬉しい。懷胎で出やつた時の子は姫ごぜか男か。息災で育つて居るかと。地ちよつと寄つても女子同士問うつ問はれつ年月に。積る言の葉繰返し フシ嬉し涙の種ぞかし。地藤の方涙ぐみ世の盛衰は是非もなや。詞其時に産落したは。無官の太夫敦盛とて。器量發明揃うた子を。今度の軍に討死させ。地夫は八島の波に漂ひ。我のみ殘る憂き離儀淺ましの身の上とかこち給へば。詞お道理〳〵。以前の御恩もあり。連合にも語りお身の片付後世の營み。お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申して。北面同然の武士只今にては。武藏國の住人私の黨の旗頭。熊谷次郎直實と人も知つた侍と。地聞くより御臺は。詞ヤアそなたの連合の佐竹次郎。今では熊谷の次郎といふか。アイ。すりやあの熊谷の次郎はそなたの夫よな。地ハアはつと吐胸の フシ氣をしづめ。詞何と相模。以前大内にて不義顯はれ。佐竹次郎と諸共禁獄させよとの院宣。自らが申宥め御所の御門を。夜の中に落してやつたを覺えてか。アツア其時の御恩。何の忘れませうぞいな。ム、其恩を忘れずば。助太刀してそちが夫熊谷を自らに討たしてたも。エ、イそりや又何のお恨みで。サア最前も咄した院の御所のお胤。無官の太夫敦盛をそちが夫。熊谷が討つたわいの。エ

エそりやまあ誠でござりますか。スリヤそなたは何にも知らぬか。サアはる〳〵と東より。今來て今の物語。地聞いて吐胸の誠しからず追付け夫が歸り次第。様子を尋ぬる其間暫くお扣へ下されと。詞を盡し理を盡し。フシ宥むる折に表より。詞梶原平次景高所用あつて推參と。呼ばはる聲。ヤア何梶原とや。見付けられては御身の大事。地先づ〳〵こちへと御臺の手を取りフシ一間へ伴ふ其中に。堤の軍次立出で。詞今日は主人直實志あつて廟參。御用あらば某に仰置かれ下されと。地に鼻付くれば平次景高。何熊谷殿は他行とな。ソレ家來ども。其石屋の親父め引立て來れ。地はつと答へて科もなき白毫の彌陀六を。フシ平次が前に引据ゆれば。詞ヤイなまくら親仁め。汝何者に頼まれ。敦盛が石塔は建てたやい平家は殘らず西海へぼつくやし。誘ゆべき相手なければ。察する所源氏の二股武士が。賴みしに違ひはあるまい。サア眞直に白狀ひろげ。僞ると鉛の熱湯。脊骨を割つて流し込むと。地おどしかけても正直一遍。詞テモ扨も御無理な御詮議。先程も申した通り。石塔の誂人は敦盛の幽靈。五輪の事は扨置き。一匣も手附は取らず。建つると其儘石塔の喰逃。せめて人魂でも手附に取つたら。小提燈の代りに致しませうに。冥土へ書出はやられず。本の是が損しやう菩提。地有りやうの申上げ願以此功德施一切。此通りでござりまするとフシ取じめなき。詞ア、何おつしやつても糠に釘と。地軍次が詞に平次は悪智惠。地大かた石塔を建てさせたわろも合點合點。熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議。先づそやつめを引立て來れと。地一間へ入れば家來ども。石屋の親父をむりやりにフシ引立て奥へ連れて行く。相模は障子押開き。日も早や西に傾きしに夫の歸りの遲さよと。フシ待つ間程なく。熊谷の次郎直實。花の盛りの敦盛を討つて無常を悟りしか。さすがに猛き武士も。スエ物の哀れを今ぞ知る。思ひを胸に立歸り。妻の相模を尻目にかけてフシ座に直れば。地軍次はやがて覆になり。詞先達て平次景高殿。何か詮議の筋ありとて御影の石屋を引連れ御出有り。奥の一間に御待と。委細を述ぶればムウ詮議とは何事ならん。アいや其方は一献を催し。梶原殿を饗し申せ。サア早くいけ〳〵。ハテ扨何を猶豫すると。地呵りちらされ是非なくも。相模に顔を見合してオクリ心を〻殘し入りにけり。ハルフシ跡見送りて。熊谷は。詞コリヤ女房。其方は爰へ何しに來た。國元出立の節。陣中へは便も無用と。堅く言付け置いたるに。詞を背くといひ。剩へ女の身で陣中へ來る事。地不屆至極

の女めと。不興の體に相模はもぢ〳〵。其お呵りを存じながら。地どうかかうかと案じるは小次郎が初陣。詞一里いたら様子が知れうか。五里來たら便があろかと。七里歩み十里歩み。百里餘りの道をつい。都迄ホ、ヲ、しんき。地登つて聞けば一の谷とやらで今合戰の最中と。とり〴〵の噂ゆゑ子に引かされるは親の因果。御了簡下さりませ。詞ママア此小次郎は息災で居ますかと。地問へば熊谷詞を荒らげ。詞戰場へ赴くからは命はなき物。堅固を尋ぬる未練な性根。若し討死したら何とする。地いゝえいな小次郎が初陣に。よき大將と引紐んで討死でも致したら。嬉しい事でござんしよと夫の心に隨ひし。健氣な詞に顏色直し。詞ホ、先づ小次郎が手柄といふは。平山の武者所と爭ひ拔駈けの高名。軍門に駈入つての働き。手疵少々負うたれども。末代迄家の譽。エ、して其手疵は。急所ではござりませぬか。ソレまだ手疵を悔む顏付。若し急所なら悲しいか。イヤ何のいな。地かすり疵でも負ふ程の働きは。でかしたと思うて嬉しさの餘りお尋ね。其時お前も小次郎と一所にお出なされたか。詞ホウ危しと見るより軍門に駈入り。小次郎をむりに引立て小脇にひんだき。我が陣屋へ連れ歸り。某は其軍に搦手の大將。無官の太夫敦盛の首取つたりと。地話に扨はと驚く相模。後に聞きゐる御臺所我が子の敵と在りあふ刀。詞熊谷やらぬと拔く所鎬摑んで。ヤア敵呼ばはり何やつと。地引寄するを女房取付さ。詞ア、これ〳〵聊爾なされな。あなたは藤の御局様と。地聞いて直實悔りし。ハア思ひがけなき御對面とフシ飛退き敬ひ奉れば。詞コリヤ熊谷。軍の習ひとは言ひながら。年はも行かぬ若武者を。ようむごたらしう首討つたなア。サア約束ぢや相模。助太刀して夫を討たせ。地何と〳〵と刀追取りせり付け給へば。アイあい〳〵と返事も胸に迫りながら。詞エ、これ直實殿。敦盛様は院のお胤と知りながら。どう心得て討たしやんした。地様子があらう其譯をと。いふもせつなきフシうろ〳〵涙。詞ア、愚か〳〵。此度の戰ひ敵と目さすは安德天皇。夫に隨ふ平家の一門。敦盛は扨置き。誰彼と鎬を削るに用捨がならうか。ナウ藤の御方。戰場の儀は是非なしと御諦め下さるべし。其日の軍の概略と。敦盛卿を討つたる次第。物語らんと座を構へ。扨も去んぬる六日の夜。早や東雲と明くる頃。一二を爭ひ拔駈けの。平山熊谷討取れと切つて出でたる平家の軍勢。中に一際フシ勝れし緋威。地さしもの平山あしらひ兼ぬフシ濱邊をさして逃出す。詞ハテ健氣なる若武者や。逃ぐる敵に目なかけそ。

熊谷是に扣へたり。返せ。戻せ。ヲ、イ。おいと。扇を持つて打招けば。地駒の頭を立直し。波の打物二打三打。いでや組まんと馬上ながらむんずと組み。兩馬が間にどうど落ち。詞ヤア〳〵何と其若武者を組敷いてか。されば御顏をよく見奉れば。鐵漿黑々と細眉に。地年はいざよふ我が子の年ばい。定めて二親ましまさん。其歎きはいかばかりと。子を持つたる身の思ひの餘り。上帶取つて引立て塵フシ打拂ひ早や落ち給へ。詞と勸めさしやんしたか。そんなら討奉るお心ではなかつたの。ヲ早や落ち給へと勸むれど。イヤ一旦敵に組敷かれ何面目に存へん。早や首取れよ熊谷。ナニ首取れというたかいの。健氣な事をいうたなう。サア其仰にいとど猶。地涙は胸にせき上げし。まつ此通りに我が子の小次郎。敵に組まれて命や捨てん。淺ましきは武士の習ひと太刀も。フシ拔兼ねしに。地逃去つたる平山が後の山より聲高く。詞熊谷こそ敦盛を組敷きながら助くるは。二心に極りしと呼ばはる聲々。エ、是非もなや。仰置かるゝ事あらば。言傳へ參らせんと申上ぐれば。地御涙をフシうかめ給ひ。地父は波濤へ赴き給ひ。心にかゝるは母人の御事。長地昨日に變る雲井の空定めなき世の中をいかゞ過行き給ふらんハルフシ未來の。迷ひ是一つ。地熊谷賴むの御一言。是非に及ばず御首をと。咄す中より藤の局。ナウ左程母をば思ふなら經盛殿の詞に就き。なぜ都へは身を隱さず。一の谷へは向ひしぞ。健氣によろうた其時は。母も俱々悅んで。勸めてやりし可愛やな。覺悟の上も今更に。胸も迫りて悲しやと フシくどき。歎かせ給ふにぞ。地御尤もとは思へども相模は態と聲勵まし。詞イヤ申しお局樣。御一門殘らず八島の浦へ落行き給ふ。中に一人踏留まり。討死なされた敦盛樣。數萬騎に勝れた高名。但し逃げのび身を隱し。人の笑ひを受け給ふが。お前の氣では嬉しいか。地御未練な御卑怯なと諫めに熊谷。詞ヲ、でかした〳〵。コリヤ女房。御臺所此所に御座あつてはお爲にならぬ。片時も早く何方へも御供せよ。サア〳〵早くいけ〳〵。地我も敦盛の御首實檢に供へん。軍次はをらぬか早や參れと。呼ばはる聲と諸共に オクリ一間へ。ハルフシ鐘は無常の。時を打つ。陣屋々々の灯火にいとゞ。悲しさ藤の方。ア、地思ひ出せば不便やな。今はの際迄も肌身放さず持つたるはコレ此青葉の笛。我と我が身の石塔を建てて貰うた價にと。渡し置いた此笛の我が手に入りしも親子の緣。魂魄此世にあるならばなぜ母には見えぬぞ。聞えぬ我が子やなつかしのこの笛やと。肌に付け身に添へ

て ヲシ盡せぬ。思ひやるせなき。詞コレ申し其笛がよい形見。經陀羅尼より笛の音を手向けるが直に追善。地敦盛樣のお聲をば聞くと思うて遊ばせと。スエテすゝめに隨ひ藤の方涙に。しめす歌口も。震うて音をぞ。すましける。合ヲシ親子の緣の絆にや。障子に映るかげろふの姿は慥敦盛卿。藤の局は一目見るより。ヤレなつかしの我が子やと。かけ寄り給ふを相模は抱留め。詞香の煙に姿を顯はし。實方は死して再び都へ歸りしも。一念のなす所。あるまい事にはあらねども。訝しき障子の影。殊に親子は一世と申せば。御對面遊ばさば御姿は消失せん。地イヤなう四十九日が其間魂中有に迷ふと聞く。せめては逢うて一言をと振放し〳〵障子ぐわらりと明け給へば。姿は見えず緋威の ヲシ鎧ばかりぞ殘りける。地はつと計りに藤の方。相模も俱に取付いて。扨は鎧の影なるか。戀しと迷ふ心からお姿と見えけるかと。俱にこがれて正體もスエテ泣きくどく。こそ哀なれ。地時刻移ると次郎直實 ヲシ首桶携へ立出づれば。地相模は夫の袂を扣へ。詞コレ申し是が親子御一生のお別れ。地せめて御首になりとも。御暇乞と願ふにぞ。藤の局も涙ながらナウ熊谷。そちも子のある身でないか。野山の猛き獸さへ子を悲しまぬはなき物を。親の思ひを辨へて情に一目見せてたもと。縋り歎かせ給へども。詞イヤ實檢に供へぬ中內見は叶はぬと。地はね退け突退け行くヲシ所に。詞ヤア熊谷暫し〳〵。敦盛の首持參に及ばず。義經是にて見ようずるはと。地一間をさつと押開き立出で給ふ御太將。ハヽヽはつと次郎直實。思ひ寄らねば女房も。藤の局も諸共に呆れながらに平伏す。地義經席に着き給ひ。詞ヤア直實。首實檢延引といひ。軍中にて暇を願ふ。汝が心底訝しく密に來りて最前より。始終の樣子は奧にて聞く。急ぎ敦盛の首實檢せんと。地仰を聞くより熊谷ははつと答へ走り出で。若木の櫻に立置きし制札引拔き。恐れげなく義經の御前に差置き。詞先つ頃堀川の御所にて六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短冊。此熊谷には敦盛の首取れよとて。辨慶執筆の此制札。則ち札の面の如く御諚に任せ。敦盛の首討取つたり。地御實檢下さるべしと蓋を取れば。ヤア其首はとかけ寄る女房。引寄せて息の根とめ。御靈は我が子と心も空。立寄り給へば首を覆ひ。詞コレ申し。實檢に供へし後は。お目にかける此首。お騷ぎあるなと地熊谷が。諫めに流石はしたなう。寄るも寄られず悲しさのちゞに碎くる物思ひ。地次郎直實謹んで。詞敦盛卿は院の御胤。此花江南の所無は。則ち南面の嫩。一枝

をきらば一指を切るべし。花に準へし制札の面。察し申して討つたる此首。御賢慮に叶ひしか。但し直實過りしか御批判いかにと言上す。地義經欣然と實檢ましまし。詞ホ、花を惜む義經が心を察し。アよくも討つたりな。敦盛に紛れなき其首。ソレ由緣の人もあるべし。地見せて名殘を惜ませよと。仰を聞くよりコリヤ女房。詞敦盛の御首。藤の方へお目にかけよ。地アイあいとばかり女房は。あへなき首を手に取上げ。見るも涙ふさがりて。變る我が子の死顏に。胸はせき上げ身も顫はれ。持つたる首の搖ぐのを。點頭くやうに思はれて。門出の時に振返りにつと笑うた面ざしが。有ると思へば可愛さ不便さ。聲さへ喉にフシつまらせて。詞申し藤の方樣御歎きあつた敦盛樣の此首。ヒヤア是は。サイナア申し。是よう御覽遊してお恨み晴らしよい首ぢやと譽めておやりなされて下さりませ。申し此首はな。私がお館で。熊谷殿と忍び逢ひ懷胎ながら東へ下り。產落したはナ。コレナ。此敦盛樣。其節お前も御懷胎。誕生ありし其お子が無官の太夫樣。兩方ながらお腹に持ち國を隔てて十六年。地音信不通の主從がお役に立つたも因緣かや。せめて最期は潔う死なされたかと怨めしげに。問へど夫は瞬も。せん方涙御前を恐れ。餘所にいひなす詞さへ。フシ泣音血を吐く思ひなり。地藤の局は御聲曇り。ナウ相模。今の今迄我が子ぞと。思ひの外な熊谷の情。そなたは嘸や悲しかろ。地かうした事とは露しらず。敵を取らうの切らうのというた詞が耻しい。我が子の爲には命の親。忝いとフシ手を合せ。地此首の生世の中。逢見ぬ事の悔しやとフシ俱に歎かせ給ひしが。地是に就きいぶかしきは此濱の石塔。敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ。秘藏せし青葉の笛石屋の娘が貰ひしとて我が手に入り。最前其笛吹いた時あの障子に映りし影は慥に我が子と思ひしが。詞も交さず消失せしは。詞アいや其笛の音を聞いてかけ出し敦盛の幽靈。人目ありと引止め。障子ごしの面影は義經が志と。地聞いて御臺は我が子の無事。悟りながらも繻木のありとは見えて隔てられフシ又も涙にくれ給ふ。地折節風に誘はれて耳を突拔く法螺貝の音喧すく聞ゆれば。義經は勇み立ちヤア〳〵熊谷。詞着到知せの法螺の音出陣の用意々々と。地仰に直實畏り急ぎ一間に入りにけり。地最前より樣子を聞居る梶原平次一間の內より躍り出で。詞かくあらんと思ひし故。石屋めを詮議に事よせ窺ふ所。義經熊谷心を合せ敦盛を助けし段々。地鎌倉へ注進とフシ言捨てかけ出す後より。はつしと打つたる手裏

劍は。骨を貫く鋼鐵の石鑿うんとばかりに息絶ゆる。スハ何者といふ中に。立出る石屋の親仁。詞ハ、アお前方の邪魔になる。こつばを捨てて上げました。扨幽靈の御講釋。承つて先づ安堵。地もうお暇と立行くをヤア待て親仁。詞コリヤ彌平兵衛宗清待てと地義經の詞に悔り。はつと思へどそらさぬ顏。詞ハレやれ〳〵とつけもない。御影の里に隱れのない。白毫の彌陀六といふ男でえす。ハ、、、。誠や諺にも。至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは。人間一生忘れずといふ。其昔母常磐の懷に抱かれ。伏見の里にて雪に凍えしを。汝が情を以て親子四人が助かりし嬉しさ。地其時はわれ三歲なれども面影は目先に殘り。見覺えある眉間の黑子隱しても隱されまじ。詞重盛卒去の後は行方知れずと聞きしが。ハテ堅固で居たな滿足やと。地聞くより彌陀六づか〳〵と立寄り。義經の顏穴の明くほど打眺め。詞テモ恐しい眼力ぢやよなア。老子は生れながらに聰く。莊子は三つにして人相を知ると聞きしが。かく彌平兵衛宗清と見られた上は。エ、義經殿。其時こなたを見遁さずは。今平家の楯籠る鐵拐が峰鵶越を攻落す大將はあるまいもの。又池殿と言合せ。頼朝を助けずは平家は今に榮えんもの。エ、宗清が一生の不覺。地是につけても小松殿御臨終の折から。平家の運命未危し。詞汝武門を遁れ身を隱し。一門の跡弔へと。唐土育王山へ祠堂金と僞り。三千兩の黃金と。忘れ形見の姫君一人預り。御影の里へ身退き。平家の一門先立ち給ふ御方々の石碑。播州一國那智高野。近國他國に建置きし施主の知れぬ石塔は。皆これ彌平兵衛宗清が。涙の種と御存じ知らずや。今度敦盛の石塔。詞に見えし時も。御幼少にて御別れ申せし故。御顏は見覺えねども。心得ぬ風俗は。ヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより。心よく受合ひしが。扨は命に代りし小次郎が菩提の爲。此濱の石塔は敦盛の志にてありけるか。ヘツエ地いかに天命歸すればとて。我が助けし頼朝義經此兩人の軍配にて。平家の一門御公達一時に亡ぶるとは。ハア、是非もなき運命やな。詞平家の爲に獅子身中の虫とは我が事。さぞ御一門陪臣の魂魄。我を恨まん淺ましやと。或は悔み。或は怒りスエテ涙は。瀧を爭へり。元來さとき大將義經。詞ヤア〳〵熊谷。障子の內の鎧櫃。ソレこなたへ地はつと答へて次郎直實。出陣の出立と好む所の大荒目鍬形の兜を着し。抱へ出でたる鎧櫃。フシ御目通りに直し置く。詞コリヤ親仁。其方が大切に育つる娘へ。此鎧櫃屆けてくれよ。コリヤ彌陀六。ヤア彌陀六とは。フ

ウ宗清なれば平家の餘類。源氏の大將が頼むべき筋は。ム、面白い。彌陀六め頼まれて進ぜましよ。したが。娘へは不相應な下され物。マア内は何でござります。改めて見ませうと。地蓋押明くれば敦盛卿。ナウなつかしやと藤の方。かけ寄り給へば蓋ひつしやり。詞イヤ此内には何にもない。ヲ、何もない〳〵〳〵。ホ、是でちつと虫が納つた。ナウ直實。貴殿への御禮はコレ〳〵此制札。一枝を伐らば一子を切つて。ヘツエ地忝いといふに相模は夫に向ひ。我が子の死んだも忠義と聞けばもう諦めて居ながらも。源平と別れし中。どうしてまあ敦盛樣と小次郎を取かへやうが。詞ハテ最前も話した通り。手負と僞り。無理に小脇にひつぱさみ連歸つたが敦盛卿。又平山を追駈け出たを呼返して。首討つたのが小次郎さ。知れた事をと地鋭なる。話に相模はむせび入りエ、どうよくな熊谷殿。こなた一人の子かいなう。逢はう〳〵と樂んで百里二百里來たものを。とつくりと譯もいはず。詞首討つたのが小次郎さ。地知れた事をと浚義道に。叱るばかりが手柄でも。ござんすまいと詞ハルフシ聲を上げ泣き。くどくこそ道理なれ。地心を汲んで御大將勇みを付けんとヤア〳〵熊谷。詞西國出陣時移る用意いかにと仰に直實。恐れながら先達て願上げし暇の一件。地かくの通りと兜を取れば。切拂うたる有髪の僧。義經も感心有りホ、さもありなん。詞それ武士の高名譽を望むも。子孫に傳へん家の面目。其傳ふべき子を先立て。軍に立たん望は。ホウ尤も。コリヤ熊谷。願に任せ暇を得さするぞよ。汝堅固に出家をとげ。父義朝や。地母常磐の回向も頼むと親しき御諚。ハ、ア有難しと立上り。上帶を引ほどき鎧をぬげば裝束白無垢。相模是はと取付くを。詞ヤア何驚く女房。大將の御情にて。軍半に願の通り。御暇を賜りし我が本懷。熊谷が向ふは西方彌陀の國。悖小次郎が拔駈けしたる九品蓮臺。一つ蓮の緣を結び。今より我が名も蓮生と改めん。一念彌陀佛卽滅無量罪。十六年も一昔。ア夢であつたなあと。地ほろりとこぼす涙の露。柊に置く初雪の日影に融ける。フシ風情なり。地ヲ、さうぢや〳〵。我が子の罪障消滅の加勢は是と切つたる黑髪。詞はなくて御大將。藤の局も諸共にフシ御涙にぞくれ給ふ。地長居は無益と彌陀六は。鎧櫃に連着をフシかけた思案のしめくゝり。詞コレ〳〵〳〵義經殿。若し又敦盛生返り。平家の殘黨かり集め。地恩を仇にて返さばいかに。詞ヲ、それこそは義經や。兄頼朝が助かりて。仇を報いし其ごとく天運次第恨を請けん。げに其時は此熊谷。地浮世

を捨てて不隨者と。源平兩家に由緒はなし。互に爭ふ修羅道の。苦患を助くる回向の役。詞此彌陀六は折を得て。又宗清と心の還俗。地我は心も墨染に。黑谷の法然を師と頼み敎を請けんいざさらば。詞君にも益々御安泰。フシお暇申すと夫婦づれ。石屋は藤の御局を伴ひ出づる陣屋の軒。御緣があらばと女子同士。命があらばと男同士。堅固で暮せの御上意に有がた涙名殘の涙。又思ひ出す小次郎が。首を手づから御大將。此須磨寺に取納め末世末代敎盛と。其名は朽ちぬ黃金札。武藏坊が制札も花を惜めど花よりも。惜む子を捨て武士を捨て。ハルフシカヽリすみ所さへ定めなき有爲轉變の世の中やと。互に見合す顏と顏。詞さらば。〳〵。地おさらばの聲も涙にかきくもりわかれて。こそは出でて行く

## 第四　道行花の追風

ハル磯千鳥。いく夜寢ざめのフシ物あんじ。ハルフシ二世とかねたる。忠度は。はかなく討たれ給ふとも。又鎌倉へ捕はれとも。スエ噂とり〴〵菊の前。心細布胸あはず。けふ立ちそむる旅衣小オクリきつゝ。なじみを重ねつる。養ひ君とフシかしづきの。表具老女ひとりを杖柱。名はありながら呼馴れし。うばらの。里を出でこして。東の空へと。ナホス思ひ立つ。フシオクリ心のへ內こそ。遙なれ足弱づれの。玉鉾にハルフシ末しら浪の武庫川や。昆陽野の池にすむ月も心は。曇る片。袖の其うつり。香も形見かと。思ひぞつもる芥川。いつか伏見も。フシ跡になし。殿御にやがて近江路と。長地見え渡りたる風景も心せかれて行く道は爪先上り小石原。老女は足をいたはりて。詞申し〳〵お姬樣。行先遠き旅の空御身の勞も出やせん。地マア暫くと道芝に立ちやすらへば。フシ菊の前。ヲヽみづからが氣のせく儘。跡先見ずに道を急ぎ。年寄つたそなたの難儀。詞足が痛みはせぬかやと。タヽキ互に問うつ問はれつる。親身なじみの底深き。にほのハズミ浦なみ。山々も茂りし峯は。フシ八王子。磯邊に見ゆる唐崎の松は扇の要とやあれこそ。志賀の。フシ山越の。よき詠ぞと敎ゆれば菊の前打眺め。詞ナウ志賀の山とはあれなるか。なつかしや忠度樣の御詠歌を。千載集へ父上が撰み入れ給へども。勅勘の御身を憚り讀人しれずと末の世迄。御名を削りし本意なさを。御歎きの涙にて。スエテ濡れし形見の片袖は。忍びあふ夜の添臥も。冷泉君は。左が。フシ寐勝手に。打着せ給ひしロずさみ。面影の霞める月ぞ宿りける。春や昔の袖の涙に。袖の涙やありし夜の。主は雲

井に隔たりて。昔語となり給はゞ。此身の果はいかならんと。フシ歎きに草の露ぞうく。同じ思ひを押隠し。老女は力つく杖に オクリ道を。助けて行先をたぐり寄せなん布引山心も。フシ闘の別れより。伊勢や尾張の海面に立つ波を見ていとゞしく。過ぎにし方は遠ざかり。知らぬ山山里々に。日を重ね夜を重ねほつれし。髻に風いとふ濱松過ぎて。山坂にかゝり鞠子やフシ沖つ波。富士の煙の立昇り。行方も知らぬ旅人の姫ごぜ連と。悪口に。唄君と添寝に燈火よせて。挑げて見れば。さうだか〳〵。いとはづかしや。消せばいとしいお顔が見えぬ。是ぞ誠に戀の闇さう言うたが無理かえいと恥しや。消せばいとしいお顔が見えぬ。是ぞ誠に戀の闇さう言うたが無理かえ。ナボスハルフシ無理もわやくも。したがひの夫に再び大磯と。心ばかりは念がれて足はもつるゝ藤澤やえにしの便星月夜鎌倉。にこそ。三重へ着きにけれ

地 榮えぬる平家の一門悉く。西海の波に亡び再び榮ゆる源氏の御代。猶長久の御祈願と鶴が岡の八幡宮。新たに造營ありければ。日々に威を増す神詣フシ賑はふ空も長閑なる。地向うの方よりのつさ〳〵供人引連れ醒井兵太。詞ヤア家來ども。道道もいふ通り主君頼朝公より。平家の餘類は根を斷つて葉を枯らせとの仰によつて。隠れ忍ぶ殘黨を取縛むる身が役目。地隨分四方に眼をぐばり。うさんな者と見るならば。男女に限らず搦捕れ。手柄はそち達褒美は某。急度申渡したとはい〳〵〳〵も仰に フシ社深くぞ入りにける。地跡に社參の一群は徒士の附々も。一際目立つ旅乘物松蔭に昇き据ゑて。詞是は鶴が岡八幡宮と申しまして源氏の御代を守りの御神。御拝がてらに風景も御覽なされて然るべう存じまするとの。地頭をさぐれば乘物より。武士にはあらぬ風俗は九條の町に全盛を。菅原といふ太夫職。詞是は〳〵今都では口利の牽頭様。喜六様宗助様などというて大概あまい若様達は。水銀なしにてん〳〵から〳〵。天上さするからくりの名人様達。それを供の侍にしてほんにマア變つた趣向ではないかいなア。かう打揃うて行たらば主はきつい機嫌であろ。そしてもう六彌太様の屋敷は爰からはつい近いげな。三年ぶりで顔見ようかとわしや飛立つやうに思うてゐるわいなア。いか様是は御尤。此喜六宗助は日頃旦那のお氣に入り。お供をするもお馴染だけ。是からおまへは大名の奥様。訛りちらす女中の中へ。ヲヽ辛氣わしやいやいなと今迄のせりふではマア舞臺つきが濟みませぬ。高が旦那は幕の内。御一門のお付合などは路考慶子

で雲上に萬事そこらはちよんの間でお付合なされませと。地餘所へ通ぜぬ教の詞知つた同士こそフシすゞしけれ。詞そこらはわしが魂贈してゐる。帶の仕樣も此形も誠屋敷の振舞でよう見て置いた屋敷の風俗。遁す物ぢやないわいな。おつとよし〳〵。それはさうぢやが久しぶりのお寐間の段。御勞の出ぬ樣に地黃丸でもあがつて。したが必ず藥酒は御無用と。フシ咄し半へ。地家來引連れ醒井兵太。詞ヤア鎌倉に見馴れぬ女の風俗都者に極つた。地平家の餘類も疑はしいは連歸つて吟味する。ソレ引立ていと立ちかゝれば。傍に二人の牽頭はわな〳〵。詞都者とは御粹方。したがお尋ねなされます平家とやらかつけとやら微塵も覺えはござりませぬ。ヤア僞るまい〳〵。武士に似合ぬがち〳〵と震ふは曲者。地ソレ括れと二人を投付け蹴飛せば。物に馴れたる菅原は。騷がぬ色目しとやかに。詞イヤこれ聊爾さんすなお侍。自らは岡部の六彌太忠澄が女房と。地聞くよりも醒井兵太。詞スリヤお前樣には六彌太殿の御内證とな。これは〳〵存ぜぬ事とて慮外千萬。拙者義は則ち六彌太殿の下目付。イヤモウ何が物でござります。當時羽利の六彌太殿へかういふ事が聞えては何さ〳〵。とにかく是は家來どもが麁相ハテ不調法千萬と。地眞面目になれば二人の牽頭。詞醒井兵太頭が高い。ハアまちつと高い。ハア〳〵と地家來も一度に眞倒。額を土にすり付くる。其間に菅原目まぜで知らせ。乘物上げさせ足早にフシ引添うてこそ急ぎ行く。地跡には一度に顏を上げ。詞是はしたり夢ではないかや。サ夢ぢやによつて醒井兵太。地皆こい〳〵と打連れてオクリ松蔭にこそ走行く。跡へしと〳〵二人連れ。小オクリ花や。楓と見し夫の。長地便を何と菊の前詞の林打連れてあてども波のかげ遠きフシ宮居を暫し伏拜み。詞何とマア林此樣にうか〳〵とさまよふも。地忠度樣のお顏が見たさ。須磨の軍の亂れよりどう成りなされた事ぢややら。詞此中は打續き夢見の惡さ。わしやいがう氣にかゝるわいの。お道理〳〵。そりやも此乳母も同じ事。以前の夫は平家の侍。兄と妹と二人の子の親。樣子あつて退去した。かはいげもない夫さへ思ひ出すが女の習ひ。娘は郡に勤奉公。兄太五平も軍に出ると言ひましたが。どうなりをつた事ぢややら。地お前も私も思ひ出す事ばかりで。夜がなよつぴと泣き暮す長の旅路の御氣休め。ちと床几へと勸められ涙交りの身の上咄。地並木の蔭に誰やらん深編笠の浪人姿。後の方には醒井兵太樣子立聞き家來ども。ソレ搦めよと追取りまく。林は姫を後にかこひ。詞

ヤア聊爾せまいぞ。我々は八幡樣へ參詣の者。何故に搦めよとは。ヤアぬかすまい。聞いた所が忠度の妻菊の前。地平家の餘類遁れぬ所と林を引退け。姫君に飛掛るをなうコレ待つてととむるを蹴倒し。泣叫ぶ菊の前をひんだかへ。既に危き折からに深編笠の侍が。兵太が利腕ぐつと捻上げ蹴飛せばアイタ、、。詞ヤア爰な編笠め。大切な科人を召捕役目の妨げひろぐ。先づ汝から詮議ある奴。地括れよ叩けと立ちかゝれば。物をもいはず雜兵を宙に摑んで天狗の礫。ばらり〳〵と投飛せば。命が大事ぢや家來ども。皆こい〳〵と言捨てて ヲシ逸散にこそ逃げて行く。地跡に二人は胸押撫で。詞是は〳〵どなたかは存じませぬが。危い所へおかげ故。コレお前もお禮おつしやれと。地姫君倶々嬉し泣き。手を合すれば。詞アアこれ〳〵お禮には及ばぬ嘸御難儀。シテ承れば女中には忠度殿に緣のある菊の前とな。ア、いや左樣ではハテお隱しなされなとつくと樣子承つた。おいとしや忠度卿には早や御果てなされたわいの。エ、そりやほんかシテ〳〵樣子は。地御存じならば聞かしてたべと ヲシそゞろ涙のふるひ聲。詞ヲ、惱りはお道理〳〵。さいつ頃須磨の浦の合戰に。岡部の六彌太忠澄に渡り合ひ。右の腕を打落され。つひにあへなく御最期と慥に世間の取沙汰。拙者京都の者なれば兼々和歌の名人と。聞及んだ忠度卿。お咄し申すも他生の緣と。地聞く内よりも姫君は。こは何とせんおいとしや。跡に殘りて自らは何樂しみに存へん。南無阿彌陀佛と懷劍にて。自害と見ゆるをなうコレ待つてと。林が宥め止めてもイヤ〳〵〳〵放して殺して情ぢやと ヲシ止むる。かひもなき叫ぶ。詞イヤサこれ女中。死ぬる命を忠度卿の爲に捨てうと思ふ心はないか。ム、何といはしやんす。過行き給ふ忠度樣の爲に此命を捨ていとは。どうしたら又お爲になりませうなと。地いふに浪人傍を眺め小聲になり。詞流石は俊成卿の御息女。雲の上人程あつて敵を討たうといふお心が付かぬかと。地言はれて姫君涙を拂ひ。詞ほんにさうぢや悲しいとばかりに心が付いて。夫の修羅の妄執を晴す敵といふは岡部の六彌太。林おぢや。お姫樣ござりませと地逸散にかけ行くをア、これこれ待つた〳〵。詞其樣にしどけなうてはア、敵討心許ない。岡部の六彌太忠澄というては武藏一國の大名なれども。おのれ討たで置かうかと女心の一念力とくと固まりましたかなと。地心探れば二人とも。ほんにさうぢやと懷劍にて互に自身の髻を。切らんとすれば押止め。詞いかにも御心底見えました。未來の夫へ命

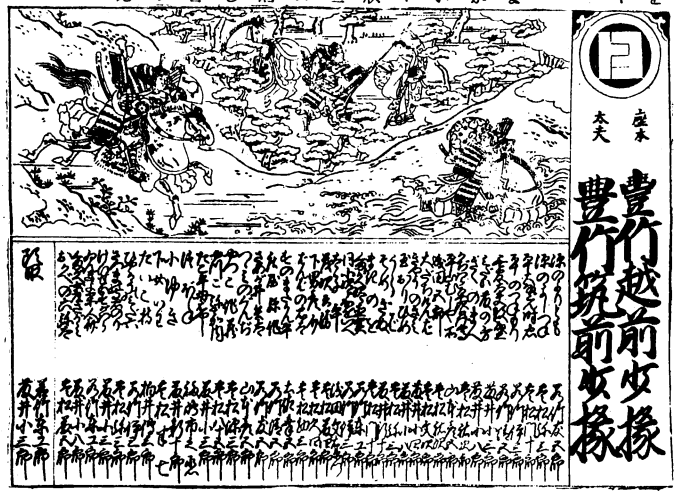
を捨て又の夫は重ねぬといふ切髪。倶に付添ひ尼法師と様を變へても主人の敵討たさうといふ老女の誠ヲウあつぱれ見事々々。地緣はなけれど見捨てぬは武士の情と。矢立取出し鼻紙に。さら〳〵さつと。フシ書認め。詞コレ此通り。敵の方への入込みやう。御緣あらば重ねて逢はうとフシ立歸れば。地ハアはつと押戴き。イヤこれ申しお前のお名はと問ふ隙も。松吹く風に隔てられ。主從二人點頭き合ひ立別れてぞ 三重〈急ぎ行く。詞ナント作藏彌嘉内。上方からけふ奥様がござるといふが。旦那六彌太様の奥様か。但しは隱居樂人齋様の奥様かいなア。こな奴しらないな〳〵。けふござる奥様といふはな。旦那様が上方でこつてりと談じやつたお色だはやい。何お色とは紅の事ではないかい。イヤこいつ興がる兵ではある。色といふはな。都九條で菅原といふお傾城の事だはやい。スリヤあの十文字とやらふんであるく。國太夫節の親方殿か。ヲイやい。旦那六彌太様の奥様になりに。けふ此内へぬめり込むのさ。なんとうまい事ではないか。イヤサ夫はさうと。合點のいかないは是の隱居様。御子息の六彌太様とは。同年位の親子の中。おらは新參者で様子は知らないが。ありやマア何たる事だいなア。おらもすつきり合點がいかない。親御様ぢやというてあの様に大事にさつしやるは。若しは旦那の念者ではあるまいか。したが念者を兄分といふは聞いたが。親分とは新らしいと。地仇口々の折からに。門前賑はふ遠見の知せ。上方の奥様只今是へ御入りと。いふもとつかは奥よりも待設の女中方。着連れ打連れ出迎へば。ヒロヒ早や昇入るゝ乘物に牽頭末社を供廻り。思付きなる出立は。フシ素人めかざる風情なり。地中にも小槇は局役しとやかに手をつかへ。詞是は〳〵長の御道中御機嫌宜しうおめでたいお國入り。地いざマアお入りと乘物の。戸を明けお手を取り〳〵に。フシかしづかれつゝ。立出づる姿は武家をやつせども。昔を殘す詞癖。詞是は〳〵皆様いかいお取持。どれがどれやら初々しい。萬事は皆を賴むぞえ。なんと喜六主宗助主と。地いはれてシツシ。詞はてこれ申し。いゝえいなア。わしや聞えぬは六様。久しぶりの女房の顏。ヤレ菅原か久しや〳〵と出さんしさうな所を。昔に變らぬ思はせぶりか。わしや逢うたら一通りきつと一番言はねばならぬと。地長う坐るもフシ日頃の習はせ。地傍には手に汗コレシツシにちやつと居直り。詞ほんにマアわしとした事が。始ての付合になめたらしいヲ、笑止と。フシ袖覆ふさへ廓めかし。詞何と皆見やつたか。都女中はわさ〳〵

と歌舞伎芝居を見る様な風俗。ほんにそれ〳〵。いや申し奥様。殿様は今日叶はぬ御用で外へお出でお歸りも追付け。まあ夫迄はお勞休め。お湯でも召して緩りつと。御祝言の御用意遊ばせ。地皆のお衆は勝手で休息。いささせ給へと皆々は奥と口とに立別れ。フシ打連れてこそ入りにけれ。地程なく又も知らせの侍。奥方様都より只今お入りと。詞の下より腰元局。こりやまあどうぢや。どちらぞが狐ではないか。是非一人は紛れ者に極つた。詞どうやら奥にござるのが。ヲヽ笑止の詞つき尻聾がなかつた。地化されまいぞ合點かと。睫を濡らす其際に。フシ日傘につるゝ八文字。歌梅や。櫻と見ゆれども。散りてかひなき袖の露。ナホスやつせばやつす菊の前。本フシ昔は雲井の月にめでけふは浮身を川竹の。フシ流れに染むるはで衣裝。地林は花車に身をかへて赤前垂の紅も。顔の紅葉と照添うて餘所目を包む廓詞。詞コレ申し太夫さん。爰が日頃逢ひたがらんした六様のお屋敷。けふといふけふ天下晴れての奥様遠慮はない。必ず氣をしつかりと持たしやんせと。地言へどしをれし菊の前。スエ我のみ世をばかこち顔。詞別れにし。其日ばかりは廻りきて。又も返らぬ人ぞ戀しきと。地上東門院の女房伊勢ノ大輔の歌の心。夕の雲朝の雨と誓ひしことも楚王の夢。はかないは浮世あじきなの。此身の上とばかりにて。フシ思はず。結ぶ露時雨。詞ア、これ〳〵それはまあ何いはしやんす。あられもない事ばつかり。エ、聞えた。昔の勸を隱さうと。堂上めかしてヲ、虚言。都九條のお傾城菅原といふ事は。何ぼ隱しても知れてある。皆の女中は都勝り。粹の上盛ナア皆さん。宜しう萬事お指圖と。地いふ間あらせず先走り。旦那お歸り〳〵と。しらせに腰元口を揃へ。詞サアもう樂ぢや。一時に二人來た衆御の正體。地本阿彌様にかけたらば。ついくら紛れに探つても。入り付けた門口は心覺えがありそな物と。言捨て奥へ入る跡へ。地岡部の六彌太忠澄は威勢も高き廣書院。しづ〳〵歸る廊下口。二人は見るよりヤアあのこなたは。詞きのふ逢うた深編笠の侍。いか様日外見しりある六彌太殿に似た顔と。地思へど變りし形恰好。不思議にあつたが其こなたが。詞いかにも横目の忍び姿。岡部の六彌太忠澄さ。スリヤ願ふ所の夫の敵と。地手早く懐劍突つかくる。二人の利腕しつかと抑へ。詞コリヤサ〳〵。まだ祝言もせぬ中から。悋氣諍ひ早い〳〵。ナ合點か。此六彌太を付狙ふ。ナ付けつ廻しつ戀慕ふ。其女房を合點で呼迎へたは互の心底。年月疎遠に打過ぎた。恨もあらう憎からう道理ぢや。ハテサ憎い〳〵は

可愛の裏よ。ハ、、、嬉しい〳〵。したが走を妾といひ聘を妻といふ。婚儀は人の大禮なれば。表立て祝言を取結ぶは暮六つ。寢物語は浮世の夢。老女一間に伴ひ用意をし召され。身は大切な親人へ今日の御機嫌伺ひ。マア夫迄はお行きやれさ。スリヤ暮六つ限りに婚禮の用意。忠澄殿。忠澄樣。待つてをりますぞえ。ハテ扨せく事はないおいきやれと。地詞の目釘打しめし。心隔ての襖と襖引別れてぞ。三重へ入りにける。フシさを鹿の。地夫待兼ねて菅原は。そろ〳〵出づる襖の間は。音も耳なれし廓の歌。唄誠なれども。逢はねばうそよ。しんき心のやるせなや。詞アノ胡弓三味線は御隱居樣を諫の御酒宴。ほんに歌の節ではある。何ぼ六彌太樣の心は變るまいと思うて居れど。三歲隔てて逢ふ迄はわしやどうも心が濟まぬ。長地逢うたらどうしてかうしてと案じも同じ菊の前。暮六つ迄もとけしなく。だまして討たん下心忍び出でたる背と背。べつたり行合ひア、こはと。飛退く二人が顏じろ〳〵。詞ハ、お前はどなたぢやえ。ハイわしは私ぢやが。マアさうおつしやるお前はどなたぢやえと。地問ひかけられて菊の前。詞わしはアノ慮外ながら。岡部の六彌太が奥樣。都丸條の菅原といふしやの果でござんすと。地聞いて菅原ホ、、、こりやをかしい。詞其菅原といふ傾城の御本家樣をとらまへて。菅原といふしやの果ぢやとはテモきつい間違ひやう。ム、腰元衆か但し又家中衆のお内儀樣か。近付に成りましよと。地上から出れば菊の前。詞イヤ〳〵和歌三神を證據其菅原はわしぢやわいな。イヤおれが事ぢや。イヤ〳〵わしぢや〳〵〳〵と地聞いて菅原呆れ果て。詞コリヤまあ何のこつちや。ム、ウ聞えた扨は大事の夫を吸取らうとする。鼬の樣な女ぢやな。そしてまああた憎てらしいあの美しい器量わいの。サア〳〵こりやもう氣疎い肝癪が發つてきたわいな。ム、よい〳〵。互にいうては水掛論。深い淺いは夫が證據。たとへ年號は變るとも。いかな〳〵變らぬ中。直々逢うて吟味する。サ、おぢや地いかうとフシ立上れば。地ヤア〳〵兩人待て〳〵と聲かけて。ゆるぎ出でたる此家の隱居名も身の上も樂人齋。焙烙頭巾大袍。左右に胡弓と三味線を。提げ二人を尻目にかけ。詞ア、紛らはしき二人の菅原。詮議の道具は此胡弓と三味線。誠や傾城白拍子は。酒色に流れて淫聲を顯はす。二人の内どちらでも。まこと傾城菅原に極まれば。祝言さするは此親のこうけ。地サア彈け聞かうと褥の上。脇息取つて打凭れ。詞サア兩人。ハテしぶとい。地何隙どると手詰の

場所。詞ヤア〳〵親人。音曲お聞きなさるゝに及ばず。其一人の紛れ者引出してお目にかけんと。地立出づる六彌太を取つて引寄せ。詞ヤア小さかしい。親をもどく不孝者見るもなか〳〵いま〳〵しいと。地脇息取つて續け打ち。なうコレ待つてと菅原と俱に驚く菊の前。わなゝきふるへば六彌太が。衿がみ取つて引寄する。共に若木の親子の中樣子有りげに見えにける。詞サア彈け女。ヤアきよろ〳〵と何うぢつくと地せんかたも。涙片手に連彈の。スエテ心々や變るらん。唄身をすつる。里あればこそ浮む瀬の。あるを軈に。うき勤。詞ヤアもうよい彈くな。詮議は濟んだ。九條の町の傾城菅原といふは。地此女に極つたと思ひがけなき菊の前。詞アイ〳〵お前はきつい調子聞き。とてもの事に祝言をと。地いそ〳〵すれば氣遣ひすな。詞モウ暮六つに程もあるまい。勝手へ入つて用意々々。ア、添いコレこちの人必ず調達へまいと。地敵討たうの氣は張弓ア、これ〳〵と菅原が。とむるもよそに走入る。やらじと駈入る菅原を引止めて樂人齋。詞我上方にありし時。見ぬ戀風にあこがれし。九條の里の傾城菅原。けふといふけふめぐり逢ふも不思議の因緣。悴六彌太。此女に暇をやれ。エ、それは。夫はとは得心せぬか。サア〳〵〳〵どうぢやと地せり詰められて返答もッシ呆れ果

てでぞ見えにける。詞イヤこれそこな若い親仁様。こなさんは〳〵〳〵。あちらをほんの菅原ぢやというて。今又私を菅原ぢやの。イヤ見ぬ懇に風ひいたのと。がつくりそつくりな物の言ひやう。若し又六彌太様が去らんしたらどうせうと思はんす。ヲ、女房にして抱いてねる。エエ。ム、、、今奥へやつたはな。ありや薩摩守忠度が冒交した菊の前さ。悴六彌太は夫の敵。祝言といふは偽り。女に涙脆い悴のうんつく。敵を討たれるアリヤ約束じやわいと。地聞くより菅原狂氣の如く。詞そんならあの今の女中様に命をやつて。此わしとはどの命で添はしやんす。海山越えてはるゞ〳〵と。添ひにきた女房の地身にもなつて見たがよい。餘りの事に涙さへ胸に氷つて出ぬわいなと叩く壘のフシいひがひなき。詞ヤアとても命のねぐさつた六彌太。連添うてもいんまに若後家。郷に歎きをかけるも不便。コリヤ子より達者な此親父。思込んだる懇の意地。おうといはうがいふまいがけふの今から身が女房。おうといへやい〳〵。親孝行ぢや。ヤイ悴。きり〳〵眼の狀地ハルフシ子は三界の首械とは。今身の上に知られたと。傍若無人の横車フシ持餘してぞ見えにける。地菅原涙打拂ひほんにさうぢや。詞よその女に見かへる夫。心中立てるは大きな愚痴。そんならおれに隨ふか。ヲ、




豐竹座興行の番附

隨ふ段か帶解いて寢て 地花やろと立寄るふり。そばなる刀拔打に切つてかゝるをかいくゞり。ヤアこりやちよこざいなほでてんがうと跳飛せば。透間なく又切りかくるを眞の當うんとばかりに倒るれば。六彌太透さず取つて投げ。注連を飾りし箱よりも陣笠鎧引出せば。見るよりハツト樂人齋。ひるむ所をはつたとねめ付け。陣笠鎧兩手に捧げ。詞なんとおやぢ。此二種の笠鎧。覺えがあらう見知りつらん。誠や故人の詞にも。用ひられる時は鼠も虎となるといふわ。まだも能ある人の身の上。こな天命知らずの匹夫め。今改めていふにはあらねど。女房菅原が六彌太をふがひなしと思はん面ばれ。もとこなやつは六彌太が旗持の雜兵。所存あつて此如く。親と敬ひ尊敬すれば。方量もなき兼ての我儘。あまつさへ我が女房に無體の戀慕。無法非道の人畜め。わるく勳かば五體を八つ裂。サアひつとでも動いて見よと。 地鎧を以てさん〴〵に折れよ碎けと打ちなやせば。頭巾はぬげて撥鬢奴。ヲシ興の。醒めたる風情なり。 地恥を恥とも思はぬ强惡。詞ヤイこな六彌太の恩知らずめ。今鎌倉で岡部の六彌太といはれて。桑花に暮すは。誰樣が蔭ぢやぞやい。わりやおめ〳〵と忠度に組敷かれたを忘れたな。其時に此郎等。右の腕を切落さずば。コリヤ此首はあるまいがな。いはゞ手柄は此奴。よいわ是からばれ次手。鎌倉殿の御所へいて。六彌太が高名は。此鼻がさしましたと。注進の上武藏一國我が手に入れるが意趣晴し。待つてをれべら坊めと。 地駈行く所を菅原がさうはさせぬと切付くる。六彌太は只たばこの烟騷がぬ太五平菅原を膝の下にしつかとねぢ付け。詞コリヤまつ此如く薩摩守忠度が。あの六彌太を下に組敷き。首をかゝんとせし所。 地一間をかけ出で菊の前かう切つたかと太五平がヲシ右の腕を打落し。詞敵といふは六彌太殿と思ひの外。誠の敵は此太五平。夫の恨を止めの刀。 地思ひしれと立寄り給へば。ヤアこれ今暫く待つてたべと。起上る太五平は。手負に屈せぬ强氣の面色。詞ア、忝い〳〵姫君。此奴が念が屆いて。よう切つて下さりましたの。コリヤ妹初霜と。聞いて悔り菅原は。ムウ初霜といふは私が稚名夫を知つたこな樣はと。 地問はれて太五平涙をうかめ。詞ヲ、かうばかりいうては合點の行かぬは尤も。おりや幼い時に別れた。わが兄の兵之助ぢやわやいと。 地聞くにいよ〳〵不思議はれず。詞ム、其又現在兄樣が此妹に惚れたといひ。そして何ぢや姫君樣。よう切つて下さつたと。覺悟の樣子は合點がいかぬ。ヲ、疑はしいは尤も。今更語るも涙の種。 地姫君樣も聞いてた

べ。詞もと我が親は。ヲ、其譯は此六彌太が推量に違はず。汝が親は平家の大將。三位中將重衡の家臣。臆病者の名を取りし。後藤兵衛守長であらうがなと。地聞いて太五平ハ、はつと仰天。詞ア扨々驚き入つたる忠澄殿の明察。地草にも心置く露の。宿り定めぬ我が生立。御存じられし樣子はいかに。詞ヲ、それ誰かある。縄付ひけと詞の下。地思ひがけなき乳母の林。見るめいぶせき縄目の恥。妹は見るよりナウ母樣かおなつかしやと走寄り。此マア縄目は何故と姫もスエ手負も驚けば。詞イヤ始終の樣子一通り六彌太が言聞かさん。菊の前もお聞きあれ。先つ頃出陣の折から。御身の父上俊成卿より密の内意。和歌の弟子たる忠度は。一方ならぬ緣もあれば。くれ〳〵頼むと餘儀なき仰。所に源平生田の合戰。向ふ敵と渡合ひ互に。馬を乘放し念なう下に組敷きしが。面ざし見知りある忠度卿。扨こそ俊成卿の御頼は爰ぞと心得。助けんと思ひながらも名ある敵。いかゞはせんとためらふ中。力勝りの忠度卿に。はね返されて此六彌太。地組敷かれしを下郎の汝。思ひがけなく後より。右の腕を切りし故。フシいたはるかひも涙ながら。地御首討つておこがましう。武門の數に列る中。詞合點のいかぬは汝が胸中。忠度卿に打ちかけしは。紛ひもなき源氏方。夫には違ひ詞の端々。源氏をさみする面魂。ハテ心得ずと思ふより。兼て見置きし此頭巾。裏に正しく書付けしは。三位中將重衡の戒名。朝夕戴く心の底。扨こそしれ者手放されずと。思ひ付いたる恩どかし。親と敬ひ是迄に心を付けしは其方が。謀叛を抑ゆる情の獄屋。今日是へ兩人をそびき入れしは。汝が素性責めさいなんで尋ねんため。所に思はず其方が。己と名のるはこりや下郎の猿智惠。地なんと思ひ知つたかと。始終を聞いて太五平はスエチ肌骨を貫く吐息の炎。フシ母は涙の顏を上げ。詞後藤兵衛守長殿に連添ひ有りしは二十年以前。七つと三つのあの子供を。付けて離別の憂き難儀。妹が乳にて漸うと俊成卿へ乳母奉公。妹は傾城あの兄は。有るにあられぬわんぱく太郎。侍の子というたらば。猶我儘が募らうかと。勘當して置く其中に。いつぞや太五平我が內へ刀を盜みに入つたを。見付けて聞けば軍に出ると。いふこそ幸ひ高名して。侍の名を續はせよと。家の系圖を折紙と。刀に添へてやつたるが。却つて害に地ヘルアシなつたよな。詞ヲ、いかにも貰ひし其系圖。開いて見れば我が親は。後藤兵衛守長ア、恥しからぬ平家の侍。おのれ何でも源氏に紛れ込み。雜兵となり裏切し。親守長に對面せんと。勇みに勇む一の谷。

後藤兵衛守長は。主君中將重衡をふり捨て逃げたりし。臆病者畜生武士と軍中の取沙汰。なむ三寶我が親は。不覺の惡名取りしかと。地胸に磐石。五臟に石火矢。なんぼう無念にありけるが。よし〳〵源氏の侍の首取つて高名し親子の耻を雪がんと。心を碎く生田の戰場。夕暮空のほのぐらく浪打際にひつ組んで。詞上になつたは慥に貴殿。シャ六彌太殿と思ふより。右の腕を只一討。よく〳〵見ればこはいかに。薩摩守忠度卿。ア、しなしたりな。よし其場にて腹切らんと思ひしかど。イヤ〳〵忠義を顯はす時節もと。味方顏にて御首を。やみ〳〵こなたに討たしたる。地無念といふも我が誤り。かく氣取られし上からは。我が一分の我を立てても。とても詮なき平家の御運。せめては入らざる此命姫君に討たれんと。殺されに出た手柄話。詞エ、おでかしなされた姫君樣。忠度卿の右の腕。切つた刀で切らるゝも。此世の因果をはたす道理。地思へば〳〵不運なる我が身の上と悔泣き扨はと驚くフシ人々の。地中に妹は側にある。刀取上げ涙ながら。顏見ぬ父の形見かと。思へばいとゞ胸せまりフシくどき。歎けば太五平は。妹が持つたる拔刀。手を持ち添へて右手の脇腹。ぐつと突込む覺悟の最期。こは〳〵いかに何故と親子は心取亂せば。詞ア、騷ぐまい〳〵と押鎭め。平家方の此兄を。切つたは妹が源氏へ忠義。此一刀の手柄に免じ。申し六彌太殿。必ず見捨ててやつて下さりますな。たつた二人の箸折屈。わたしやあいつが不便にどさる。成人して名は菅原と聞いたを便り。上方へ上つた序に九條の町。なつかしさに逢はうと思へど。身は角介のさびた形。全盛飾る妹が耻と。三筋の町の格子の先。よいよ鹿子樣。ヨウつりひ樣と。ぞめきに紛れて名を問へば。客に揚げられ柏屋の。二階の障子に影法師。三味線取つて投節の。聲を聞いたがコリヤ兄弟の名乘。其時の音色も聲もあり〳〵と。おりや耳の底にしみ付いて。今に忘れぬ兄弟のよしみ。それ故最前三味線で。慥に妹と見極めても。平家に緣あるそちなれば。よもや添うては下さるまじと。現在妹に。女房になれの。惚れたのと。心に思はぬ惡道も。かく計はん心の內。推量してたべ母者人。エ、ついに一日孝行せず。先立つ不孝赦して下され。せめて未來は。勘當地々々をと跡いひ兼ねる。いぢらしさ母は取分け妹もスエ正體涙に菊の前。我とても恩と情にからまされ。敵さへなき身の上は。兎にも角にも我が夫の。甲斐なき御運とばかりにて見合す四人がとも涙フシ前後。不覺に見えけるが。地何思ひけん六彌太は林

が縄目引ほどき。詞太五平が白狀にて家名知るれば詮議に及ばず。女ながらも敵の餘類。ヤア〳〵後藤兵衛が妻娘此家に叶はぬ早や出て行けと。地聞いて菅原今更にそりや餘りぢや胴慾ぢやと。いふをも聞かず姫と林をフシ引立て。庭へ突出し。詞女房去つた。ハテこりやナ遣手の付いた傾城菅原敵の娘と聞いては添はれぬ。元の廓へ流し者。付添ひ歩くは遣手の役目。スリヤ此わしは。ヲヽサ兄弟の縁が切るればコリヤ女房。一世の別れの名殘を惜めと地情の詞。ハヽア盡せぬ御恩とフシ伏拜む。ハルフシ折から拍子木家中の夜廻り。六彌太邊に心付け。詞コリヤ〳〵そこな傾城遣手。故郷へ歸る錦の袋。地ソレ持つて行けと投出す。二人は立寄り取上げ見れば。詞行暮れて木の下蔭を宿とせば。ヲヽ其下の句は。花や今宵のあるじならまし。忠度卿の最後の一首。ヤア扨は形見か地ハアはつと歎き給へば林も俱に。ありし昔を悔泣き。詞ハテ扨これ此六彌太が寸志の情。源氏は今を盛の日の出。平家は暮行く。アレ約束の暮六つ。夜に入れば敵味方のあいろが見えぬ。ソレ早う〳〵。ハアお志。忘れはせじ。地もうおさらばと立上れば。手負は今ぞ此世の名殘。花や今宵のちり櫻。妹一人親兄の別れを胸に八重櫻。姫は形見の言の葉に結ぶ。心のいと櫻。あとに老木の姥櫻涙の雨や。小夜嵐。生死不定は世の中のふだん櫻といさめてもつきぬ。なごりの。山櫻ちり〴〵に。こそ別れゆく

## 第五

地魏王は鄭袁が讒によつて美人の鼻を剔がしむるとかや。征夷將軍頼朝公相從ふ大小名。岡部の六彌太忠澄を初めフシ威儀を。正して相詰むる。地頼朝御簾に向はせ給ひ。詞此度の戰に平家の一門西海の浪の泡と消失せし事。全く頼朝が武略にあらず。地是皆神明佛陀の御加護と存じ奉るとフシ卑下の詞も奥床し。地平の忠笏取直し。詞西國にて源九郎義經平家を悉く討亡し。其虚に乘つて兄頼朝も討取り一天下を併呑せんと某をたばかり。京の君を娶り神璽内侍所を奪ひ。直に鎌倉へ攻入らん由急ぎ告げ知らせん爲來つたり。地屹度征伐然るべしと賢人顔の佞人はフシいはねど夫と知られける。地六彌太聞兼ねつつと出で。詞何と言はるゝ時忠卿。義經公に限り左樣な御所存少しもなく。腰越迄御出でありしを平山が讒言故鎌倉へも御入れなく。直に御切腹召さるべきを舊臣の輩押止め。我が君への執成は六彌太が披露承る。夫に御邊が何知つて扣へ召されときめ付くれば。地時忠も反打かけフシ互に色立ち見えければ。地

頼朝誓しと制し給ひ。詞やをれ六彌太。佞人輩が讒言を用ゆべき我ならず。義經腰越に屯するは鎌倉を顧へさんとの手配ならん。地さすれば弟とて容赦はならず。討取つて我が存念を晴すべしと氣色變つて宣へば。時忠は思ふ壺心の内に含む笑。六彌太猶も進み寄り。詞然らば義經公誠の謀叛にもなされよ。三種の神器の内神璽内侍所。此二品は先達て義經公の御手にあり。帝都を守護しましませば則ち官軍。地それに敵たい弓引き給ふは朝敵も同然。武備盛んなる時は却つて其身を害すと申す。此儀いかゞと言上すれば頼朝騒がず。詞ヲヽ其儀は某工夫を凝し置きたる事あんなれ其子細は。安德天皇十握の御劍を携へ入水ありしと聞くより早く。都八條大納言兼房卿と申合せ。老松若松といふ海士子供を浪間に入れて海底を探させけるに。地龍宮城へ奪ひたる十握の御劍を取返し。兼房卿に差上げしを御所持あつて御下向。頼朝拜諾仕り。此桐が谷へ御新殿をしつらひ將軍の宮と傳き。詞即ち此宮より綸旨を乞受け。義經との戰は官軍と官軍のはれ勝負。地幸ひの諸大名一同の出仕。それ〳〵との詞の中。はつと領掌謹んで御劍の宮を携へて。フシ御簾間近く持出づる。地頼朝公恭しく寶劍を取飾り。天顔の恐れありと玉座の御簾。半頃迄帝上ぐれば フシ各一度に尊敬する。地時忠大口明いてから〳〵と笑ひ。詞頼朝は智仁兼備の大將と聞きしに違ひし愚將よな。スリヤ誰によらず寶劍を所持したる者あらば將軍の宮と敬ふかと。地づつと立寄り寶劍取つて打折り〳〵。白洲へかつぱと投付くれば。是はと皆々仰天敗亡。時忠は緩々と座に直り。詞ヤア騒がれそ頼朝。あの寶劍は紛れもなき眞赤な贋物。シテ〳〵其贋物といふ慥な證據が。ヲヽ證據なくて折るべきや。寶劍を所持したる者當宮に立つるとある故。言聞かするよつく聞け。都にて義經某を招き。何とぞ三種の神寶奪取つてくれよとある密の頼み。のつぴきならず智略を以て奪取りしかど。呑込めぬ義經が心腹故先づ二色は渡したれども。御寶隨一の寶劍は某が肌身も離さず屹度所持せり。地疑はしくば是見よと懐中より取出せば。邊も輝く十握の御劍。頼朝公を初めとして列座の人々一時に。フシあつと恐れをなしにけり。地頼朝重ねて宣ふは。詞今より時忠卿を將軍の宮と仰ぎ奉らん。ヤア〳〵諸大名萬歳を唱へられよと。地棟梁の臣の一言にもつてうじられ勝に乘り。詞此上は贋宮を引出し面縛させんと。地ずつと立寄り御簾引ちぎればコハいかに。思ひがけなき判官義經。寶劍奪取りもんどり打たせ。足下にぐつと踏付け給ひ。詞ヤ

ア天命知らずの大納言。安德天皇寶劍を抱き入水ありしと僞りしを。合點行かずと察するに御邊が奪ひ所持する由。兄頼朝と言合せ樣々心を盡したは。此寶劍を奪返さん謀。地サア尋常に繩かゝれよと仁心深き義經の。詞にひるまぬ横紙破り無念の顏色齒がみをなし。詞エ、たばかられし奇怪千萬。平山と心を合せ汝等兄弟同士打させ。一天下を一呑と巧みし事も水の泡。地よし〳〵此上は絶體絶命。命限りに切拔けんと太刀ひん拔いて切付くる。引つばづして勾欄より白洲へどうど蹴落し給へば。六彌太すかさず飛びかかり ヲシ高手小手に縛むる。地頼朝心地よげに打守らせ給ひ。詞國家を騷がす大罪人刑罰急度糺すべし。地それ計らへと宣ふ所へ。土砂踏散らしあわたゞしき知らせの早打かけ來り。詞扨も平山の武者所謀叛の巧み顯れし故。扇が谷に野陣を構へ此御殿を追取卷き攻入らんとの催し故。地早速御注進仕ると大息ついで訴ふれば。義經につこと打笑み給ひ。詞ヤア〳〵六彌太。扇が谷平山が陣所に馳向ひ。有無をいはずず討取るべしと。地仰は重き兩將の。詞につゝ岡部の六彌太いざ打立てや尤と。御前に並居る隨兵ども。我先がけん〳〵と勝色見せたる八重梅の。花芳しき弓取の。聲も清しき軍立扇が谷へと 三更へ急ぎけり。地平山の武者所頼朝兄弟誅罰せんと。扇が谷に陣屋をしつらひ ヲシ士卒を隨へ控へゐる。地かゝる所へ岡部の六彌太軍兵引具し眞先に大音上げ。詞ヤア平山の武者所。汝が惡事顯れし故此所に陣所を構へ。御兄弟へ敵せん由頼朝の仰を蒙り岡部の六彌太向うたり。地手に立つ武士は下合へと ヲシ高らかに呼ばはつたり。地かくと聞くより平山末重陣屋より踊出で。詞ヤア〳〵岡部の六彌太。此方より馳向ひ討取らんと思ひしに遙々とようせた。地某が手を下すに及ばずソレ兩人。物ないはせそ討取れと。 ヲシ下知しながらに引返す。地畏つたと醒井番場。無二無三に討つてかゝる。さしつたりと渡合ひ持つて開いて眞向かざし。鋭き刄の電光石火獅子忿迅虎亂入。馬手は堅割弓手は胴切。二人が命は草葉の露。ソレ遁すなと軍兵どもをめいてかゝるを事ともせず。向ふやつばら嫌ひなく。大げさ小げさ車切片端切立てまくり立て。追立て〳〵めつた切り。こりやたまらぬとばら〳〵〳〵。跡を慕うて忠澄が ヲシ遁さじやらじと追うて行く。地さしもの平山途を失ひ馬の鼻を立てかへて。落行かんとせし所へ。岡部の六彌太取つて返し。やらじと尾筒をしつかと取り。詞コリヤ〳〵〳〵と引戻す。シヤ邪魔ひろぐな毛二才め。地そ

こ立去らずば蹄にかけ胴腹に風間を明けん。爰を放せと鐙の鳩胸あふり打立て鞭打くれ。ハイ〳〵〳〵と コハリ乘出せば。どつこいどこへと引留むる。追立て引留めはみ轡。音はちり〻んからころり駒の嘶土煙。六彌太苛つて突放せば馬は前立頭轉倒。ころりと落ちる平山を起しも立てず引伏せフシ首引抜かんとせし所へ。地源義經公平大納言を引立てさせしづ〳〵と立出で給ひ。詞ホウ手柄々々我兄弟へ敵せんと巧む平山。縛首討ち刑罰糺せよと。仰にはつと六彌太忠澄手早に取縄しつかとかけ。フシ水もたまらず首打落す。地かゝる所へ熊谷入道飛鳥の如くかけ來り。義經公に打向ひ。東へ下る道すがら始終の様子承る。時忠卿は大納言の位有れば私にはなり難し。蓮生法師が出家の役都へ連れ行き禁廷の御差圖を蒙らん。地何とぞ愚僧に御預け下されかしと願へば義經打うなづかせ給ひ。詞ヲヽ神妙神妙。高位の身なればうかつには殺されず。いかにも和僧が願ひに任せ時忠を預くべし。直に都へ連れ上り院の廳の御沙汰にかけ鬼もかくも計ふべしと。地仰にはつと蓮生法師時忠を預り申し。莞爾と笑ひてすさみたる一首の歌。詞極樂にも功の者とや思ふらん。西に向ひて後見せねばと地詠歌を殘し暇乞して歸りける。實に末の世に至りても敵に後を見せぬとはフシ此理としられたり。地義經御喜悦限りなく。祿を貪る佞人輩を亡せし此上は。三種の神器を守り奉り兄弟打連れ都へ上り。此趣を奏聞せん勇めやかたゝ〳〵打立てと。御諚に任する岡部の六彌太御立ちさふと呼ばはれば。御供奉の大小名綺羅を飾りて歸洛ある。朝敵亡びの凱歌の聲。太刀は鞘弓は袋と納りて千代榮えぬる源氏。四海太平豐なる國ぞ。久しかりけらし

寶暦元辛未天　臘月十一日

作者　淺田一鳥　浪岡鯨兒　並木正三　雛波三藏　豐竹甚六

故人　並木宗輔